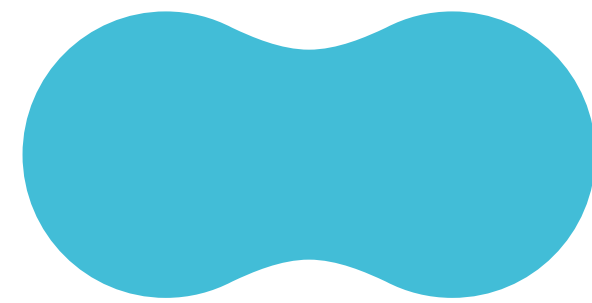


武蔵野美術大学
グローバル人材育成プログラム
活動実績報告書



Globalize!

Musashino Art University



Globalize!
Musashino Art University

武蔵野美術大学
グローバル人材育成プログラム
活動実績報告書

文部科学省
経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援
平成24年採択 タイプB：特色型

Introduction

Globalize! for Next

未来を見据え、語学力と造形言語を ハイブリッドに身につけた人材を育成する

～「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」5年間の助成期間を終えて～

武蔵野美術大学 学長

長澤 忠徳

世界の“ムサビ”であること

本学は1929年の創立時からアジアの留学生を多く受け入れてきた歴史があります。また、当時の教員は世界に出て、欧米の美術を学んでいた方も多くおりました。そこには今日的なハブ機能が備わっており、本学を介して世界とつながるような状況があったとも言えるでしょう。これが本学におけるグローバルの原点です。

グローバル化がますます加速していた2009年に創立80周年を迎えましたが、本学を世界のコンテクストに乗せるという視点から、「世界美術大学学長サミット」「国際デザインシンポジウム」という2つの記念事業を世界へと発信しました。こうした取り組みも足がかりとなり、それ以前から行っていた海外の美術大学との交流など、ムサビ流のグローバル教育の充実が図られてきました。世界を行き来し、現地の学生と寝食をともにすることで培われる語学を越えたコンビビリティ（懇親力）。美術やアートという分野においてはそうした関係性の構築も重要であり、日常を共有することが創作のインスピレーションとなります。学内に

においても学科という縛りを設けずに、全学の学生が等しく留学生と交流できる体制をつくり、本学ならではのグローバル人材育成の環境を整備してきました。

グローバルに開けた視野

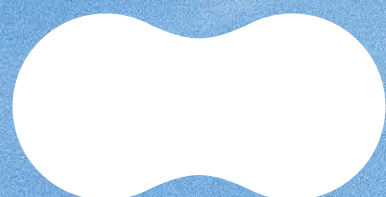
文部科学省の「グローバル人材育成推進事業（特色型）」に採択され、2012年度から5年間の助成を受け、こうした環境づくりはますます促進されました。例えば、本学で90年代から行われている「訪問教授」という課外授業は、世界のアーティストや研究者を招いて行う講座ですが、招く先生の数を倍増させ、また、各国のトップレベルの教育機関と進めてきた国際交流プロジェクトも、協定校とのプロジェクトも含め、実施件数を大きく増やしました。語学面では、専門領域を英語で学ぶ授業を充実させ、また、教員自身の英語力向上のサポートにも努めています。学生は制作した作品を解説する機会が多いこともあり、英語でのプレゼンテーション・スキルを学ぶ課外授業も開始しました。一方で、海外志向の学生の留学を後押しする必要性もあ

り、交換留学協定校を増やし、結果として本学を訪れる交換留学生も増加しました。留学生は積極的に授業などに参加する傾向がありますが、留学生と一緒に学ぶことで、学生が語学力を向上させるだけでなく、この5年間で自分を打ち出す姿勢が身についてきたという実感もあります。助成を得たことで実現し、現在も発展を続けるプロジェクトに、「Global Design Initiative(GDI)」があります。これは2014年に本学が主催した「グローバル・デザイン教育フォーラム2014」にて発案、合意されたプロジェクトで、ケルン・インターナショナル・スクール・オブ・デザイン、ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校、シンガポールのラサール・カレッジ・オブ・アート、台湾の実践大学に本学を加えた5校が、2015年から1年毎にそれぞれがホストとなり、GDI流の先進的なデザイン教育の方法論を確立すべく行う国際ワークショップです。2019年まで続くこの取り組みは、学生が海外での経験を積むだけでなく、引率す

る教員もそこで課題を発見できるような双方向への効果を期待しています。

未来を見据えた人材育成

英語やフランス語などの語学教育に加え、本学が教えているのは、美術やデザインという領域でこそ養うことができるクリエイティビティ、つまり造形言語のリテラシーです。これは文字を必要としない、身体と感性で解読する世界といえます。そして、語学力と造形言語をハイブリッドに身につけた人材を育てることが、未来のグローバル社会を見据えた時に重要であると感じています。今後も学生たちが世界を体験できるようなプログラムを拡充させながら、美術大学ならではの感性と知覚を大切にしたいグローバル人材育成を実践していきます。



Globalize!
Musashino Art University



CONTENTS

02	Introduction
06	About Globalize!
08	Chapter 1 GO GLOBAL 世界でまなぶ
	海外留学
	海外短期語学研修
	アラムナイ・グローバル・サポーター
	海外インターンシップ
	REPORT 01-06
20	Chapter 2 CONNECT TO THE WORLD 世界とつながる
	MAU WORLD MAP
	国際交流
	海外コンペティション
	REPORT 07-12
36	Chapter 3 LEARN GLOBAL 世界をまなぶ
	外国語教育の新たな試み
	訪問教授
	ランチトーク
	REPORT 13-16
49	DATA 2012-2016

About Globalize!

武蔵野美術大学 グローバル人材育成プログラム

1 CONCEPT コンセプト

2012年より文部科学省「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援(旧:グローバル人材育成推進事業)」の採択校となり始まった「武蔵野美術大学グローバル人材育成プログラム」(Globalize!)は、美術・デザインにおける高度な専門技術と知識を活用できる様々な能力を身につけ、なおかつ、海外においてもそれらをいかに活用するために必要かつ十分な外国語力を身につけた人材を育成することを目標としています。そして、これまで以上に国際交流の場を設けるほか、海外の美術大学とのネットワークを強化し、より多くの学生が海外で学ぶ機会をもてるように留学を推進。このように世界へと視野を広げる環境づくりとプログラムをいっそう充実させていく取り組みです。



2 SYMBOL シンボル

「武蔵野美術大学グローバル人材育成プログラム」を学内外へと波及させるためにシンボルを作成しました。この2つの円がつながる抽象的な形は、学生たちが異文化との出会いを通じて、さらに大きな円を描いてほしいという願いが込められています。そして、学びの中にいる現在はその過程であり、様々な変化していく可能性を、その弾力的な形で表しています。また、地球を覆う空や海は国境などと無関係に、世界をめぐる。自在に行き来する雲のような、瑞々しい水滴のような形は、そうしたボーダレスな存在を表象化したものであり、色彩が想起させるイメージも含め、国際的に貢献できる真にグローバルな人材という意味も込められています。



3 VISION

世界で活躍するために 必要な「15」のこと

本学が考えるグローバルな人材に不可欠な3カテゴリー／15項目を用意し、国際的な人間として活躍できる総合的な力を身につけるプログラムを構成しました。



CATEGORY 1

語学力・コミュニケーション能力

- 1 外国語プレゼンテーション能力
- 2 バイリンガルでポートフォリオを作成する能力
- 3 海外の展覧会やコンペティションに独力で参加できる能力
- 4 海外の美術・デザイン専門大学の学部レベルで就学可能な語学力
- 5 海外の美術・デザイン専門大学の大学院レベルで就学可能な語学力
- 6 第二外国語
- 7 「1対1」、「1対多数」、「多数対多数」など、様々な場面におけるコミュニケーション能力
- 8 美術・デザインの専門用語を用いず作品やアイデアを説明できる能力
- 9 美術・デザインを発信するためのコンピューター・リテラシー

CATEGORY 2

主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

- 1 独立自尊の精神で自分を主張するとともに客観視できる能力
- 2 問題解決能力
- 3 挫折しない心など様々な能力

CATEGORY 3

異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

- 1 自己のアイデンティティの確立
- 2 日本文化について幅広く発信できる知識と経験
- 3 日本語によるディベート能力

4 PROGRAM プログラム



Chapter 1

GO GLOBAL

世界でまなぶ



留学や海外インターンシップを促進、 世界を体験する

武蔵野美術大学グローバル人材育成プログラムでは、キャンパスを飛び出し、海外で生活して学ぶ機会を促進しています。「留学」や「海外インターンシップ」を通じて、現地での経験や異文化を吸収し、グローバルな価値観や視野を獲得することで、自身の創作活動に還元し、卒業後の進路に選択肢を増やすことができます。本学と協定を結んだ8つの大学への交換留学をはじめ、本学教員の引率のもと海外で現地の大学とワークショップ等を行う「国際交流プロジェクト」や海外の企業などで実際のビジネス現場を体験する「海外インターンシップ」も、教育の質を高めることで単位認定のされる科目になりました。また、安心して海外での経験を積めるように、本学の国際センターによるサポートのほか、海外で活躍する卒業生による本学在校生サポート制度「アラムナイ・グローバル・サポーター」を創設し、世界各地にネットワークを築いています。

今後は、更に幅広い視野に立ち、美術、デザイン、建築、映像における世界の動向や、海外進出のためのメディア戦略など、美術・デザインを取り巻く国際状況を鑑み、先を見据えた内容も展開していく予定です。

海外留学

交流協定を結ぶ海外の高等教育機関と行う学生交換制度（協定留学）を1998年に開始して以来、毎年協定締結校の留学生を本学に受け入れ、本学学生を各協定校に派遣しています。2017年度よりロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校が加わり、現在協定校は8校（パリ国立高等芸術学校、アールト大学美術デザイン学部、ミラノ工科大学デザイン学部、プラット・インスティテュート、ベルリン芸術大学、弘益大学校、ケルン・インターナショナル・スクール・オブ・デザイン、ロンドン芸術大学）となり、留学先で履修した単位のうち適当と認めたものについては修得単位の認定をしています。

この5年間の主な動向は、2013年にベルリン芸術大学に1名派遣枠が増え、派遣人数の合計が8名となり、送り出しの数としては、前年より2名増加。 2016年度派遣より、派遣期間が1年間に限定されていたパリ国立高等芸術学校、アールト大学、ミラノ工科大学について、期間を半年と1年で選択出来るように変更し、派遣枠をそれまでの1.5倍に増やしました。協定留学のほかに、認定留学（単位認定）や一般留学があり、2014年に海外短期語学研修も新規開設。また、卒業生に向けて本学が使用权を有するパリの「国際芸術都市」アトリエへの1年間の入居を認める「パリ賞」があります。

協定留学派遣・応募状況（2012-2016年度）

派遣 年度	パリ国立高 等芸術学校		アールト大学 美術デザイン 学部		ミラノ工科大学 デザイン学部		プラット・ インスティ テュート		ベルリン 芸術大学		弘益大学校		ケルン・ インター ナショナル・ スクール・ オブ・ デザイン		ロンドン 芸術大学 ※2017年度より	
	F	D	F	D	F	D	F	D	F	D	F	D	F	D	F	D
2016	0 (0)	1 (2)	0 (0)	2 (5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (3)	1 (3)	1 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (3)		
2015	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (2)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	1 (2)	1 (2)	1 (2)	0 (0)	1 (2)	0 (0)	1 (2)		
2014	0 (1)	1 (2)	0 (0)	1 (2)	0 (0)	1 (5)	0 (0)	1 (4)	0 (0)	2 (5)	0 (0)	0 (0)				
2013	0 (1)	1 (2)	0 (0)	1 (4)	0 (0)	1 (2)	1 (1)	0 (1)	0 (1)	2 (4)	1 (1)	0 (0)				
2012	1 (2)	0 (0)	0 (0)	1 (4)	0 (0)	1 (4)	0 (0)	1 (1)	0 (1)	1 (3)	0 (0)	0 (0)				

*上段は派遣者数、下段()内は応募者数
*Fはファイン系、Dはデザイン系からの応募

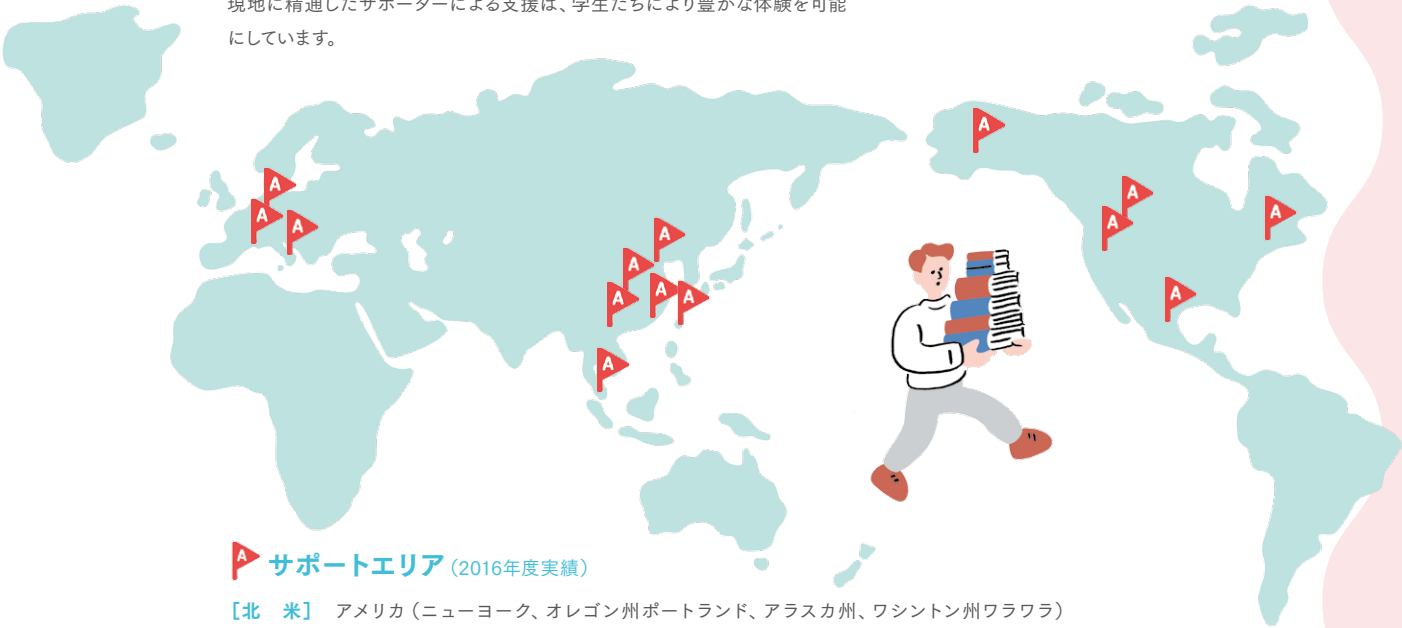
海外短期語学研修



語学力の向上と留学促進のために、英語とフランス語の短期集中講座として海外語学研修を新規に開設。研修修了者は言語文化科目として単位取得できる制度を設けました。研修中は、ギャラリー見学や文化についての講義を受ける機会があり、現地の美大生との交流も行いました。2013年度は、School of Visual Arts（アメリカ）に12名、Goldsmiths, University of London（イギリス）に8名の学生が参加。2014年度は、Goldsmiths, University of Londonに学生8名が参加。2015年度は、Goldsmiths, University of Londonに学生9名が参加。2016年度は、Goldsmiths, University of Londonに学生10名、Maison de l'université（フランス）に学生2名が参加しました。

アラムナイ・グローバル・サポーター

学生が海外でも安心して学び、活動することができるよう、現地でのサポート体制も強化を進めています。卒業後に海外を拠点に活動する人も多い美術大学の特色を活かし、2013年より海外で活動する卒業生による「アラムナイ・グローバル・サポーター」を設置しました。現在、世界各地に15名のサポーターがおり、それぞれの拠点において、留学生たちの生活のサポートや相談をはじめ、現地での案内や通訳、海外での就職に関するアドバイスなどを実施。現地に精通したサポーターによる支援は、学生たちにより豊かな体験を可能にしています。



サポートエリア（2016年度実績）

- 【北 米】 アメリカ（ニューヨーク、オレゴン州ポートランド、アラスカ州、ワシントン州ワラワラ）
- 【中 米】 メキシコ
- 【欧 州】 イタリア、スペイン（バルセロナ）、オランダ
- 【アジア】 中国（上海、北京、広州）、台湾、香港、タイ

海外インターンシップ

学生が本学で培った能力を活かし、将来的に海外での就労も選択肢となるように、全学科全学年の学生を対象に2013年から海外でのインターンシップを始めました。希望者は学内での適正審査を経て選考し、語学力の確認や現地の情報などの事前レクチャーを受け、派遣されます。これまでアメリカ（シアトル）、タイ（バンコク）、ベトナム（ホーチミン）の企業へ派遣し、現地では編集、WEBデザイン、ゲームデザイン、美術館ボランティアスタッフ、NPO、映像スタッフ、シアタースタッフなどの職種を体験。実施期間は春休みや夏休みを利用し、ホームステイやホテル滞在をしながら最長で約4週間滞在。インターンシップを通じて、異なる言語や文化に触れながら、現地での生活を経験した参加者は、自分の将来を考えるきっかけや、語学力の向上の必要性など様々な気づきがありました。

近年の動向としては、2014年2月、タイの日系企業に派遣した2名の学生が、現地のサッカーイベントのデザインワークを担いました。2014年度は、アメリカのみで実施し、7名の学生が参加。2015年度は、アメリカとベトナムで参加は5名。2016年度は、同じくアメリカとベトナムで、参加は7名でした。

なお、2016年度から海外インターンシップの参加者には単位を付与するなど、意欲的な参加を促進しています。



研修先（2014年度-2016年度）

国・都市	研修先
アメリカ シアトル	世界最大規模のフェアトレード団体が運営する店舗
	子供向け演劇シアターの団体
	10代女子向けの映像ワークショップを運営する団体
	WEBホスティングサービス会社
	シアトルの有名美術館
	バイリンガルの子供向け日本語教育塾
ベトナム ホーチミン	現地在住日本人向け情報誌の出版社
	日系ゲーム制作会社

参加人数（2014年度-2016年度）

国・都市	アメリカ・シアトル	ベトナム・ホーチミン
2014年	7	0
2015年	4	1
2016年	6	1
合計	17	2



REPORT 01：留学

異国での経験の全てが、
自らの蓄えになる ——
三澤直也

卒業生の創作支援として、「パリ賞」と呼ばれるヨーロッパ留学の機会を設けています。2名の受賞者は1年間、用意されたパリのアトリエで活動に励みます。2012年に留学した三澤直也さんにお話を聞きました。

——パリ賞に応募した動機についてお聞かせください。

パリに限らず、異国の文化に触れ、デザイン活動を行う上での、自らの経験値を上げたいという思いが先行してありました。在学中、助手着任中はシンプルなモダンデザインを追い求め、日本のわびさびに象徴される「素」の美学に傾倒していました。しかし、フランスの芸術文化は装飾の美学です。この相反する美学の間に、自分がものづくりを続ける上でのアイデンティティを確立したいと考えたのが、大きな動機です。

——現地では言語・コミュニケーション面で苦労したことはありますか？

日本でフランス語の学校に通いましたが、やはり十分とはいかず、語学の部分で不安を持ったままの渡仏となりました。そのため、語学の壁は常についてまわりますが、その分、簡単な会話でもコミュニケーションが取れた時の喜びが大きいです。また滞在している「Cite Internationale des Arts」内は外国人

が多く、滞在者同士の会話には英語を用いる事が多くあります。引き続き、フランス語と英語の勉強も、調査制作活動と併せて意欲的に行うつもりです。

——制作に取り組む上で、語学力の必要性はどう思われますか？

デザイナーにとって、その作品自体が共通言語になる可能性はもちろんありますが、言葉を用いて説明するという事も、必要不可欠の要素であると思います。それは世界中のどこにいても同じ事で、異なる言語の習得は、その活動範囲を自ずと広げるものと痛感しています。自分のつたない語学力を恥ずかしく思いながらも、新たなステージに向けて語学習得に意欲を燃やしています。



——留学の経験はどのような意義があると思われますか。

ものづくりをする人間にとって、インプットの量は、その表現や活動の幅を広げる役割を持つと思います。よって、意識的な視点を忘れなければ、異国での経験の全てが、自らの蓄えになると信じています。

プロフィール

三澤直也 みさわ・なおや

2007 年造形学部工芸工業デザイン学科インテリアデザインコースを卒業。
2008 年から 2012 年までインテリアデザイン研究室で助手を務め、2012 年 9 月よりパリの「Cite Internationale des Arts」に滞在している。

REPORT 02 : 留学

日本では体験できない
壁を越える ——

秋山幸 (アーティスト)

東京オペラシティ アートギャラリーで展示中の秋山さんは、2006年に本学大学院を修了し、2008年から2010年まで北京中央美術大学へ留学。現在も海外を視野に活動続ける秋山さんに、ご自身の留学体験などを伺いました。

——展示で発表された近作にある唐草模様のような植物のモチーフは中国に渡って得た表現方法のようですね。留学経験が作品にも作用したわけですが、本学に在学中から海外への意識はありましたか？

在学中にヨーロッパを旅行して、ベネチア・ビエンナーレも見に行きました。そこで世界の端を見た気がして、美術を志すものとして、ここまで行かないといけないという感覚がありましたね。大学院を修了後はギャラリーに所属し、海外へとアプローチをしていたので、一段とその意識は高まりました。日本だけでは頭打ちだし、絶対海外に行かなければって。でも、みんなが行っている場所つまらないし、それまでアジアは全然見ていなくて。それで、アジアをきちんと見るべきだと思って、中国を選びました。

中国を考える前はドイツに行きたかったんです。でもドイツは漠然としているというか、自分との距離感が分らなくて。中国は、同じアジアで、自分のアイデンティティに近いと思えたのですが、ヨーロッパに行くなら西欧人にならないといけ

ない、成功するためには西欧人と対等ではなくはいけない、と当時は考えていて。それよりも自分らしい打ち出し方をした方が、結果的にはヨーロッパで評価を得る近道だし、面白いんじゃないかって考え直したんです。それで、アジアの空間とか東洋思想とかを学んだ方がいいと思うようになりました。

——大学を出てからの留学でしたが、具体的にはどのような流れで北京中央大学への留学を実現されたのですか？

中国政府奨学金というのがあって、それを受けました。研究計画書と作品資料と現地の大学の内諾書を送って、それが通れば面接があります。中国語で質問さ

れるのですが、なんとか覚えてたの中国語で通過しました(笑)。日本で中国語を半年間勉強してから留学したのですが、全然話せなくて。現地では語学学校にも通っていました。ムサビにいた時に、アジアの美術や中国語の授業もあったと思うので勉強しておけばよかったと思いましたね。英語ももっとやっておけばよかった。

——留学を通じて感じたこと、得られたことなどあれば教えてください。

海外にいと絶望的なこともあります。常に外国人として見られるし、語学の壁や制作の壁にもぶつかる。辛いこともありますが、それがむしろ人間らしいと思うんです。決められたことを当たり前のようにこなすより、日本にいては体験できない壁にぶつかるから、それで、改めて日本人であることを考えられたし、そういう機会は海外でなければ経験できないんじゃないかと思っています。

プロフィール

秋山幸 あきやま・みゆき

1980年岡山県生まれ。2004年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業。2006年武蔵野美術大学大学院油絵コース修了。2007年第22回ホルベイン・スカラシップ奨学者。2008年から2010年まで北京中央美術大学実験芸術科研究生として留学。現在は東京を拠点に活動している。

2013年6月に「Globalize!」(<http://global.musabi.ac.jp>)に掲載した内容を改稿して掲載しています。

REPORT 03 : グローバルキャリアデザイン



英語が第2言語だからといって言い訳にはならない ——

臼井大貴 (Nike SB / Nike skateboarding Footwear designer)

2015年度より1・2年生を対象に始まった授業「グローバルキャリアデザイン」。国際社会やグローバル経済といった世界の動向から、美術やデザインにおけるグローバルとはどのようなことか、様々な講師を迎え学んでいきます。この日は、2007年に本学を卒業し、現在、アメリカ・ポートランドでナイキのスケートボード用シューズをデザインしている臼井大貴さんに、海外で仕事をするにあたり、自身が経験してきたことや考えてきたことを話していただきました。



「インダストリアルデザインコースを選んだのは、スポーツシューズのデザイナーになりたかったから」と話す臼井さんは、大好きだったナイキでデザインをしたいと考え、同コースを選んだそうです。そして、2年次の途中で休学し、靴の専門学校にも通いました。1年後に復学すると、ムサビを訪れたナイキの東京デザインスタジオのディレクターと話す機会をもち、その後、ポートフォリオを持ってナイキのスタジオに。英語が話せず、ジェスチャー交じりで自分の作品を説明し、その後、3年次の夏からインターンシップをすることになりました。インターンを終えると、同級生には就職が決まった人もいて、内心では焦っていたそうですが、「変な自信があって、なんとかなるだろう」と課題に打ち込む日々。そして、卒業制作をナイキの人にも見てもらいたいと思い、案内を送ると、その直後に連絡が届き、「働いてみないか？」とナイキジャパンへの誘いを受けました。ナイキジャパンで働き始めると、本社の

あるポートランドに行く機会も多くなりました。ナイキで働くことを考えていた臼井さんは、学生時代から映画を見たり、ボッドキャストを聴いたり、自分なりに英語の勉強を積み重ねていました。それでも仕事に就いてからは「最初は英語が話せなくて悩んだ」そうです。しかし、「ナイキではいろんな国の人が働いています。40%くらいの人が英語が第2言語。だけど英語が話せて、ランゲージバリアを越えて仕事をしている。英語が第2言語だからといって言い訳にはならない」。日本人だから英語が話せない、というのは通用しない。意識を変えることで働きながら英語を身につけました。英語で仕事をするように

なって8年が過ぎても、「完璧ではないし、まだまだ覚えることがある」そうです。そして、臼井さんが心がけていることは、「海外で働くという自分に酔わない。素々と勉強」という姿勢です。もうひとつ臼井さんが強調していたこと。それは「留学をしていなくても海外で働くことができる」ということ。「外国で働く人は、何かしらツテやバックアップのある人だけと思っていた」という臼井さんも、実際に海外で働く機会を得られ、海外にも住むことになりました。語学が堪能であることに越したことはありませんが、可能性はいろんな人に開かれているということを臼井さんは教えてくれました。

プロフィール

臼井大貴 うすい・ひろたか

2007年に工芸工業デザイン学科を卒業。インターンをしていたナイキジャパンへ就職後、現在はナイキ本社のあるアメリカ・ポートランドに勤務し、スケートボード用のシューズデザインを手掛ける。

2015年6月に「Globalize!」(<http://global.musabi.ac.jp>)に掲載した内容を改稿して掲載しています。

REPORT 04 : 海外インターンシップ



海外インターンシップ報告会

2013年から始まった海外インターンシップ。2015年度は6名の学生がアメリカ・シアトルとベトナム・ホーチミンに7月27日から8月23日までの約1ヶ月滞在し、現地企業で研修を行ってきました。10月6日の報告会から3名の参加者の研修の様子をレポートします。

佐藤有悠美さん

工業芸デザイン学科3年

研修先: Kids Academic Lab
(アメリカ/シアトル)

小学校低学年から中学2年生までの日本人/日米バイリンガルの子どもたちに行う授業のアシスタントや、研修中に実施されたサマーキャンプのプログラムを企画しました。英語を話す機会はホームステイ先の家族と外出先が主でしたが、現地のアーティストやデザイナーの工房を訪問し、話を伺う機会もありました。また、研修先の先生の知り合いの会社のロゴをデザインしました。休日にはシアトルからバスで3時間ほどのバンクーバーへ。関心のある欧米の教会を見ることができたのも貴重な体験でしたし、文化の違いや考え方について学ぶことができた研修でした。



槇本伶さん

基礎デザイン学科3年

研修先: Pacific Software Publishing
(アメリカ/シアトル)

就職活動では海外も視野にいたいと考え、また、今一番興味があるウェブデザインを現場で学べるということだったので参加しました。研修先では運営するウェブサイトのデザインを行いました。ここで日本とは働くことに対する考え方の違いが実感できました。9時～17時が労働時間になりますが、デザインチームの人たちは8時には出社し、17時きっかりに帰っていきます。残業せず、仕事の後は自分の時間として使っていました。また、私のデザインに対する現場の意見を聞くことができたのもよい経験でした。英語が十分に話せなくても、表情やジェスチャーなどで伝えられ

ると思っていたのですが、最低限の語学力は必要だと実感しました。

小野寛志さん

油絵学科3年

研修先: Grateful Days

(ベトナム/ホーチミン)

発展する東南アジアを、今までとは異なるビジネスという視点で見ることができると思いホーチミンでの研修を選びました。研修先のGrateful DaysはITベンチャー企業で、私の配属はオンラインゲーム事業部でした。私はアートディレクターを任せられ、企画会議をもとにデザインを考え、グラフィック・チームに伝えます。また、担当したゲームには週間イベントがあり、イベント用に新しいアイテムのデザインも手伝いました。研修の最終週にはそのイベントのコンセプトの企画にも携わり、メインビジュアルも作成。会社にはベトナム人の日本語通訳が何人かいたのですが、昼休みなどを利用して彼らに日本語を教えるという機会もありました。



REPORT 05 : 海外インターンシップ

客観的に日本や、自分のことについて
見つめ直す機会になる ——

ベトナム・ホーチミン Grateful Days

河本貴愛さん (映像学科3年)

本学では実際のビジネス現場、しかも海外で仕事を体験する「海外インターンシップ」(科目名: インターンシップII ※2016年度から単位認定)を実施しています。2016年度は、7月25日から8月21日まで4週間実施され、アメリカ・シアトルに6名、ベトナム・ホーチミンに1名が参加しました。今回、ベトナムでインターンシップを行った河本貴愛さんに現地での様子を伺いました。

私は卒業後の進路として進学や作家活動など、様々な選択肢がある中で、積極的に就職をしようと考えていました。そこで、就活を目前に控えた今、実際の仕事を体験することで、「就職」に対する考え方を固めておきたいと考えインターンシップに参加しました。そして、海外を選んだ理由は、自分が今まで英語力に自信が無いという理由で海外留学なども避けていたので、おそらく学生としては最後になるこのタイミングで、海外で生活をし、日本と異なる文化などにも触れたいと思ったからです。その両方の気持ちがあったので、このプログラムに参加することを決めました。ベトナムを選んだ理由としては、アジアの文化が好きなのでそこで生活してみたかったこと、私はこれまでベトナムに行ったことがありませんでしたが、ニュースや文献で国の様子を知り、実際に自分の目で見てみたいと思っていたからです。インターン先のグレイトフルデイズ株式会社では、「MILU」というゲームのウェブサイトに掲載する記事をつくる業務でした。MILUの知名度を上げ、最終的にはユー

ザーを増やすということが目的です。業務の中で最も印象に残っている出来事は、「公園で遊んでいるベトナムの人たちの遊びに交ぜてもらおう」という企画です。交ぜてもらうために、まずベトナム人や向こうで知り合った日本人にベトナム語を教えてもらいました。今まで、授業以外では一人での制作が多かったため、他の人と一緒に企画を進めることの苦労、楽しさ、喜び

などを知ることができました。全ての作業を終えた時の一言では言い表せないような感覚が、とても印象深く心に残っています。ベトナムは親日の人が多く、日本に興味を持っている人もたくさんいました。海外にいるからこそ、客観的に日本について、自分のことについて見つめ直す機会にもなるはずです。今回のインターンシップで得られたのは、自らの強みや弱みを自覚できたことでした。また、インターンシップを通じ色々な話を聞くことで、就職をゴールにするのではなく、自分の将来を思い描きながら行動することの大切さを感じることができました。就活目前のこのタイミングで自分を見つめ直すことができ、とても貴重な経験になりました。



REPORT 06 : Go Global Japan Expo 2015

日本で色々なことを試し、
自分のスタイルを作る ——

ヴィタリー・スカラバン さん（映像学科3年）
ベラルーシ共和国出身・国費留学生

2015年12月20日、明治大学駿河台キャンパスでグローバル人材の育成を牽引する全国の国公立大学57校が集結し、「未来を切り拓くグローバル人材を目指して～進学・留学を考える～」をテーマに、高校生・保護者・高校教育関係者向けのイベント「第3回 Go Global Japan Expo 2015」が開催されました。現役留学生が、現代の日本について語るトークイベントも行われ、本学映像学科3年のヴィタリー・スカラバンさん（ベラルーシ共和国出身・国費留学生）も登壇。イベント終了後に祖国や留学について話を伺いました。

——ベラルーシはどのような国ですか？

ベラルーシはロシアとヨーロッパの間に位置する小さな国です。その結果、ベラルーシはヨーロッパの多くの戦争で多大な被害を受けました。そのため、今のベラルーシ人は平和を最も大事なもののひとつとして考えています。きのこ以外に毒を持つ生物もなく、自然災害もなく、犯罪率も比較的的低く、ベラルーシは旧ソ連の国の中でいろんな意味で一番安全です。全体的に生活がゆっくりと流れる落ち着いた雰囲気のある国です。

——なぜ日本に留学しようと思ったのですか？

経済的にますます発展する中国と関わる仕事がしたいと思い、高校卒業後にベラルーシ国立大学東洋学科に入学しました。しかし、いざコースを選ぶことになった時、自分でも驚いたことに中国語では

なく、日本語のコースを選択しました。そして3年間、日本を中心に東洋の文化や歴史を勉強し続け、ある日、日本語の先生に日本の文部科学省の奨学金制度について教えてもらいました。以前から勉強したいと考えていた写真を専門にして、日本大使館で試験を受けて日本の国費留学生となりました。

——どうしてムサビを、そして映像学科を選んだのですか？

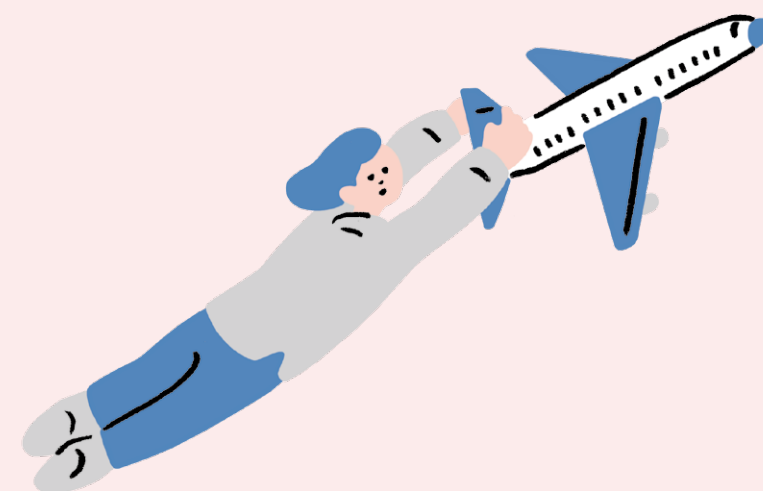
私の元々の奨学金は専門学校での勉強を目的としたものでした。しかし日本の大学も経験したくて奨学金期間を延長しました。そして先生と相談し、武蔵野美術大学を選んで3年次に編入しまし



た。大学に在る2年間でしっかりしたポートフォリオを作る目的もありますが、私にとっては、美大の雰囲気を経験するのが大きな理由かもしれません。結局のところ好奇心で大学に入ったとも言えます。写真をもっと勉強するつもりで編入したので、映像学科の写真コースに決めています。3年の写真コースは基本的には自由なので、私は今、色々なことを試すことによって自分のスタイルが作れるように努力しています。

——将来の夢は？

国際的な映像関係の仕事がしたいです。世界中の様々なところに行って、様々なことを経験したいです。一回旅に行くと、同じ場所にいられなくなる性格なので。



Chapter 2

CONNECT TO THE WORLD

世界とつながる



海外で、キャンパスで、 国際交流のさらなる活性化

グローバル化にともなう海外への意識の高まりや本学グローバル人材育成プログラムの実施を機に、2013年度より、教員が学生を海外へ引率し海外高等教育機関との交流を図る国際交流プロジェクトを正課科目として開設しました。新設した「国際交流プロジェクトI、II」は、全学科で履修できるようにし、実際に複数にまたがる学科の学生が単位を修得しました。

海外でのワークショップやフィールドワークを行う国際交流プロジェクトは、学生にとって現地の文化に触れ、現地の人々と交流する貴重な体験の場です。プロジェクトに参加したことでグローバルな活動を目指す学生も増えるなど、国際交流の成果は着実に学生へと浸透しています。

採択件数も年間5件から倍増の10件となり、学生が主体的に行う国際交流企画にも積極的に補助し、募集件数を増やしています。

MAU WORLD MAP

5年間で12校が協定校に加わりました！

本学では、グローバルな教育を推進するために世界の教育機関とのネットワークの構築を進めています。5年の助成期間で12校が新たに国際交流協定校に加わり、現在33校と協定を締結しています。その中には交換留学協定校が8校あり、相互に留学生を受け入れています。



国際交流



国際交流プロジェクト

近年の実施例

《2013年度》

- | | | |
|----|--|----------|
| 1 | アトリエ・フィダウガ、ガレリア・デコ (ブラジル) | 参加学生 2名 |
| 2 | テネシー大学ノックスビル校、オハイオ大学、ノーザンイリノイ大学 (アメリカ) | 参加学生 8名 |
| 3 | 同済大学 (中国)、ESADSE (フランス)、IsraAID (イスラエル)、シンガポール国立大学 (シンガポール) | 参加学生 4名 |
| 4 | レディング大学 (イギリス) | 参加学生 4名 |
| 5 | Stenby School of Craft and Design (スウェーデン) | 参加学生 8名 |
| 6 | バンドン工科大学 (インドネシア) | 参加学生 17名 |
| 7 | 雲林科技大学、東海大学、台湾芸術大学 (台湾) | 参加学生 8名 |
| 8 | カールスルーエ造形大学 (ドイツ) | 参加学生 5名 |
| 9 | ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校 (イギリス)、ケルン・インターナショナル・スクール・オブ・デザイン (ドイツ) | |
| 10 | パリ国立高等美術学校 (フランス) | 参加学生 12名 |

《2014年度》

- | | | |
|---|---------------------------|----------|
| 1 | ロンドン大学スレード校 (イギリス) | 参加学生 17名 |
| 2 | トマスバタ大学 (チェコ) | 参加学生 9名 |
| 3 | 華南理工大学 (中国)、雲林科技大学 (台湾) | 参加学生 7名 |
| 4 | バンドン工科大学 (インドネシア) | 参加学生 17名 |
| 5 | スウェーデン国立芸術大学 (スウェーデン) | 参加学生 4名 |
| 6 | ラザール・カレッジ・オブ・アート (シンガポール) | 参加学生 3名 |

教員が海外へ引率し海外高等教育機関との交流を図る国際交流プロジェクトを正課科目として開設。

《2015年度》

- | | | |
|---|---|----------|
| 1 | カールスルーエ造形大学 (ドイツ) | 参加学生 6名 |
| 2 | ロンドン大学スレード校 (イギリス) | 参加学生 10名 |
| 3 | バンドン工科大学 (インドネシア) | 参加学生 23名 |
| 4 | Design Academy Eindhoven (オランダ) | 参加学生 5名 |
| 5 | ビリニウス美術大学 (リトアニア) | 参加学生 8名 |
| 6 | ソウル芸術大学 (韓国)、上海視覚芸術学院 (中国)、レディング大学 (イギリス) | 参加学生 7名 |
| 7 | 台湾国家教育研究院 (台湾) | 参加学生 10名 |
| 8 | パリ国立高等美術学校 (フランス) | 参加学生 5名 |
| 9 | ケルン・インターナショナル・スクール・オブ・デザイン (ドイツ) | 参加学生 3名 |

《2016年度》

- | | | |
|---|-------------------------------|----------|
| 1 | ピコール大学 (フィリピン) | 参加学生 11名 |
| 2 | Design School Kolding (デンマーク) | 参加学生 6名 |
| 3 | 雲林科技大学 (台湾)、華南理工大学 (中国) | 参加学生 10名 |
| 4 | バンドン工科大学 (インドネシア) | 参加学生 25名 |
| 5 | 台湾国家教育研究院 (台湾) | 参加学生 10名 |
| 6 | ロイヤル・メルボルン工科大学 (オーストラリア) | 参加学生 9名 |

学生による国際交流企画

近年の実施例



《2013年度》

国際交流ワークショップ
『思い出』を交換しよう
Exchange "Our Memories"
2013年11月23日(ワークショップ) @小平市中央公民館、
12月3日～8日(展示) @小平市民文化会館
外国人を含む10代から60代の参加者が思い出のある物を持ち寄り、他者の思い出からコラージュ作品を制作するワークショップを開催。完成した作品は「こいだら国際交流芸術展 2013」で展示しました。



《2014年度》

グエン・ブオン・リン アーティスト・トーク
2014年8月1日 @武蔵野美術大学
ベトナム人アーティストのグエン・ブオン・リン氏を招き、彼女が参加するグループ「ニヤサンコレクティブ」の活動や自国のアート状況、また今後の展望について話を伺い、学生との意見交換を行いました。



《2015年度》

CAplus Exhibition : Y-GENERATION
2016年3月22日～3月26日 @レンタルスペースくら
様々な美術学校の有志による若手アーティスト団体『CA+』が開催した展示は、中国、台湾、韓国、イギリスからの留学生も参加。国際色豊かな内容となり、美大を目指す外国人留学生が多数来場しました。



《2016年度》

ジャイデブ・ロアジャ アーティスト・トーク
2016年11月28日 @武蔵野美術大学
バングラデシュ出身のアーティスト、ジョイデブ・ロアジャ氏によるトークイベントを行い、絵画とパフォーマンスという自身の表現方法について話を聞くほか、実際のパフォーマンスや意見交換を行いました。

国際交流プロジェクト 1

デンマークと日本、工芸デザイン交流プロジェクト

【デンマーク】



本学の工芸工業デザイン学科研究室がデンマークを訪れて実施したプロジェクトです。歴史的にロシア圏であったフィンランドデザインに対して、広域にわたる北欧スカンジナビア諸国として栄えたデンマークデザインの変遷を学習の根拠とし、一連の調査、ワークショップを行いました。

デンマークの西に位置する都市コリングにある美術大学Design School Koldingでは木製テーブルウェアをデザイン、制作しました。相手校の教授はプロダクトデザイン領域で、英語による講義は、学生たちが「聞く」「話す」「考える」をほぼ同時に出来ることを重視しました。ここ数年、学生は海外でデザイン活動を希望する傾向にあるため、このプロジェクトが工芸工業デザイン学科内における今後の展開の布石となりました。

DATA

渡航先:デンマーク
交流機関:Design School Kolding (デンマーク)
実施期間:2016年10月31日～11月6日

国際交流プロジェクト 2

東アジアの文化とデザイン

【台湾】

本学の基礎デザイン学科研究室が台湾で実施したプロジェクトです。雲林科技大学(台湾)と合同で、華南理工大学(中国)も加え、日本と中国の文化資源の調査に基づく「東アジアの文化資源とデザイン」についてのワークショップを行いました。

テーマは、「文化とデザインについて考えること」。ワークショップはデザインの調査と提案、見学と講義、プレゼンテーションを含めた内容としました。台湾の文化財や伝統的な町並みの色彩調査を通して、その保存、活性化を考察し、また、金門島や台南を調査フィールドとして、地域コミュニティにおける人間の暮らし(商業、生活)、地域デザイン(観光デザイン、商業デザイン)について考える調査を行いました。



DATA

渡航先:台湾
交流機関:雲林科技大学(台湾)、華南理工大学(中国)
実施期間:2017年2月19日～2月26日

国際交流プロジェクト 3

Design with Bamboo and Rattan

【インドネシア】

本学の工芸工業デザイン学科研究室がインドネシアで実施したプロジェクトで、2015年度から継続して行っています。現地にて、竹およびラタンなどの非木材植物素材を利用したデザインの可能性を探ることが目的です。

竹・ラタンを利用したデザインワークショップを行うことにより、学生が造形を「発見」し、また竹・ラタンの新しい可能性を示すモデルを提案。また、講評会に複数の大学から教員、学生を招聘し、より幅広い情報交換の場となることを目指しました。本学にて英語のみで行っている講義「Bamboo Designing」を受講した学生が、英語でのプレゼンテーションを実践するほか、国際的な人的ネットワークを拡張させました。



DATA

渡航先：インドネシア

交流機関：バンドン工科大学（インドネシア）

実施期間：2017年3月4日～3月17日

国際交流プロジェクト 4

ダッチデザインDNAを探る

Design Academy Eindhoven (DAE) との交流プロジェクト

【オランダ】



本学の視覚伝達デザイン学科がオランダで行ったプロジェクトです。社会におけるデザイナーの役割へのニーズは、マーケットの最終段階における形の創造から、社会そのものを変える新しい創造的能力へと変遷しつつあります。また、日本の企業や各分野のプロはますますグローバルに仕事をする力が求められています。

このような社会的要請に応え、「ダッチデザインDNAを探る」をテーマに、アイントホーフェンにあるDesign Academy Eindhoven と連携。アムステルダムでのデザインスタジオ「Thonik」の専門家と交流、現場見学やワークショップなどを通じて、デザインリサーチから社会での実践まで、オランダのソーシャルデザインの特徴を理解しました。

DATA

渡航先：オランダ

交流機関：Design Academy Eindhoven（オランダ）

実施期間：2016年3月4日～3月14日

国際交流プロジェクト 5

Global Design Initiative

2014年に本学で開催した国際シンポジウム「グローバル・デザイン教育フォーラム 2014 東京」。このシンポジウムで構想された「Global Design Initiative」が、2015年から稼働し始めました。Global Design Initiativeは、本学の協定校である、ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校（イギリス）、実践大学（台湾）、ケルン・インターナショナル・カレッジ・オブ・デザイン（ドイツ）、ラサール・カレッジ・オブ・アート（シンガポール）が、1年に1回持ち回りで1週間程度のワークショップを開催し、互いに授業として単位を認めるという取り組みです。それぞれの学校から教員1～2名と学生3名が参加して行われ、ホスト校がワークショップをコントロールし、最終評価を全員で行います。第1回はシンガポール（2015年）、第2回はケルン（2016）、第3回は東京（2017年）で実施され、今後、第4回は台北、第5回はロンドンでの開催が予定されています。

第3回の本学開催では、学生コアメンバー3名とサポーター13名が参加。各校から来日した8名とともに、本学所在地である小平市をベースに、そこで見つけた「Strangeness」をデザインでどう活用するか、どう見せるかなどを探求しました。そのurban-rural な土地について、本学のアンテナ基地である六本木のデザイン・ラウンジにて発表しました。



DATA

グローバル・デザイン教育フォーラム 2014 東京

2014年2月24日・25日 @東京ミッドタウン・デザインハブ

《パネリスト》

フィリップ・ハイデカンブ（ケルン・インターナショナル・スクール・オブ・デザイン）

ニコラス・ローズ（ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校）

ベンカ・プルジョサーマン（ラサール・カレッジ・オブ・アート）

ワンルー・チョウ（実践大学）

長澤忠徳（本学）

《概要》

参加5校の取り組みの共有化・課題の抽出を経て、「Global Design Initiative」というチームを結成。教員・学生が各国を巡回し、ユニットで学び、教育力を高めるプログラムを構想した。

Global Design Initiative

2015年 第1回「FOREIGNERS」（シンガポール）

2016年 第2回「Designing Strangeness」（ドイツ・ケルン）

2017年 第3回「Designing Strangeness II」（東京）

※今後、台北、ロンドンでの開催を予定

海外コンペティション



KADA ASIA DESIGN GRAND PRIX 2017
GROUP DESIGN COMPETITION 1st PRIZE

佐藤太亮

工芸工業デザイン学科4年

INSPIRELI AWARDS 2016 2nd PLACE

渡辺大輝

建築学科3年

グローバル人材育成のために本学では海外でのコンペティションへの参加を促進しています。2016年と2017年にそれぞれ海外のコンペに入賞した建築学科の渡辺大輝さんと工芸工業デザイン学科の佐藤太亮さんに、コンペについてや参加後の自身の変化について伺いました。

参加した海外コンペについて

佐藤 私が参加したコンペは、韓国オートモーティブデザイン協会（KADA）が主催した「東京カーデザイングランプリ2017」で、ここで入賞した人が韓国で行われる「KADA アジア・デザイングランプリ2017」へと進めました。先輩から教えてもらい参加したのですが、これまでも車のスタイリングに関するコンペは経験がありました。この大会は当日課題が与えられ、即興的にアイデアをまとめることが求められ、デザインを構築する上での哲学を評価されるようなコンペだったのですが、異分野の審査員が多かったことも刺激

的でした。東京で1位になりアジア大会にも参加しましたが、ここでは個人戦のほかに韓国や中国の代表者と組んだグループ戦もあり、課題に対して徹夜でコンセプトをまとめ、最終的に私たちが1位に選ばれました。東京大会の参加者は学生のみでしたが、アジア大会にはデザイナーも参加しており、スケッチの上手さに圧倒されましたね。

渡辺 私が参加したのは、チェコを拠点にしている「INSPIRELI」という建築のソーシャル・ネットワークサイトが主催したコンペでした。35歳以下の建築家と学生を対象に、作品イメージのみを3枚投稿するというとてもシンプルな参加条件だったこともあり、ちょうど終わった大学の課題から3枚選んで参加しました。その後、主催者から片言の日本語で「キミは勝つ可能性がある」といったメールが届き、怪しいなと思っていたら、ある日知らない番号から着信があり、入賞したことを告げられました（笑）。3枚の画像を送っただけですが、世界の建築家55名の審査があり、投票の結果上位3名が選出され、私は2位でした。授賞式はチェコで行われたのですが、教会を会場にして、チェコに駐在する日本大使も参加されるなど、私の想定を遥かに超えるスケールで驚きました。

縮まる海外との距離

佐藤 現地では当然英語でのコミュニケーションになりますが、チームのメンバーが全員日本のアニメ好きということもあり、打ち解けるのは早かったですね（笑）。ムサビで英語の勉強にも力を入れていたのでコミュニケーションに困ることはなかったですが、紙と鉛筆があれば大抵のことが伝えられるということは実感しました。コンペで仲良くなったメンバーとは今もチャットをしていて、英語を使うことが日常的になりつつあります。コンペ自体はこれ以前に参加していますが、自分の考えを知ってもらう機会になりますし、良いも悪いも他者から評価を与えられるのは大きな経験ですね。

渡辺 私は昨年の「INSPIRELI AWARDS」が初めてのコンペだったのですが、日本のコンペにも積極的に出してみようという気になりました。実際にその後、いくつかコンペに参加しています。チェコの授賞式が初めての海外渡航で、英語でのスピーチなども不安があったのですが、ムサビを知っている建築家の方がいらっしゃったりもして、安心して話ができました。主催者からは、ヨーロッパの建築事務所への紹介などサポートの申し出もありましたし、帰国してからは、海外の建築の大学への進学にも興味が湧いてきています。コンペに参加したことで海外との距離が縮まったように感じますし、とりあえず参加することが大切だと思いました。

佐藤 日本の自動車メーカーへの就職が決まっていますが、私も元タイタリアのカーデザインの会社に憧れていました。企業の派遣という形もあるようですし、海外に出ることを今後も検討していきたいですね。

渡辺 私はアートに近い建築に興味があります。アメリカのごく一部の流れになりますが、将来的にはそういうことができたいと思っていますし、当然海外での活動が視野に入ってきます。言語など乗り越えなければならないものは多いですが、ムサビでまずは基礎となる部分を築きたいです。



工芸工業デザイン学科4年 佐藤太亮さん



（上）グループ戦で1位を獲った仲間たちと。（右）提案したモビリティのスケッチ。



建築学科3年 渡辺大輝さん



（右）コンペに投稿したイメージ。（下）「駅舎」を設計したもので、審査員から高い評価を得た。



REPORT 07 : グローバル人材育成フォーラム



世界を変えるアイデア

2013年11月下旬、お茶の水女子大学で、文部科学省グローバル人材育成推進事業の採択校（東日本第2ブロック）イベント「グローバル人材育成フォーラム」が実施されました。国際的な活躍を目指す学生たちの支援を目的とした本事業において、本校の学生たちも、「世界を変えるアイデア」のプレゼンテーションに登場し、美大ならではのパフォーマンスで会場を沸かせました。

本学の代表となったチーム「ネガポジ」は、第2ブロックからエントリーした13校から8校に見事選抜され、この日の最後のプレゼンターとして舞台上に立ちました。2、3年生5人からなるこのチームは、この日発表した学校の中では唯一の女性のみの編成。メンバーは、リーダーの建築学科の西田早苗さん、油絵学科の諏訪葵さん、空間演出デザイン学科の櫻内彩美さん、視覚伝達デザイン学科の吉富ゆいさん、建築学科の一居萌美さんで、今年の夏休みに国際センターが企画した、英語でポートフォリオをプレゼンする3日間の講座「美大生のためのプレゼンテーション」英語プログラムに参加したことがきっかけで出会いました。

彼女たちは、国際化が進む今、子どもたちの国際感覚を育む方法として「ヴィジュアル・コミュニケーション・アート」を提案。言語を越えた視覚的な表現による交流を通じて、幼い頃から異文化を理解しようというものです。寸劇仕立てのスピーチの合間に、実際に幼稚園で行ったお絵描きのワークショップの映像を挿入し、最後には



2013年12月に「Globalize!」(<http://global.musabi.ac.jp>)に掲載した内容を改稿して掲載しています。

りがちです。英語など違う言語をツールとして物事を考え直すことで、自分の考えも明快になり、また、その元にある異文化を理解するのに役に立ちます。私は日本を出る気はあまりないのですが、そういうことがあるため、他の言語を学びたいという思いがあります。

櫻内彩美さん（空間演出デザイン学科）

私は舞台美術を専攻したいと思っていますが、今回のプレゼンで寸劇をやることになり、演劇的な発想を活かすことができました。高校の時にも留学経験がありますが、来年、大学の交換留学制度を利用して、協定校のベルリン芸術大学へ半年間留学することになっています。舞台を観るのが好きなので、環境の違いによる思考やデザイン、考え方のプロセスなどを感じながら、自分の見識を広げ、アイデアを増やしていきたいと思っています。

諏訪葵さん（油絵学科）

私は概念的な作品を作ることが多いのですが、説明をするのに日本語だと難しいな

REPORT 08 : 国際交流ガイダンス

タイポグラフィと
コミュニケーション・デザイン・プロジェクト

吉富ゆいさん（視覚伝達デザイン学科4年）
渡航先：イギリス・レディング大学

2015年11月20日に行われた「国際交流ガイダンス」。本学にて実施されている様々な国際交流プログラムに参加した3名の学生が、プログラムに参加したきっかけやその内容、参加した感想を発表しました。イギリス・レディング大学での国際交流プロジェクトに参加した吉富ゆいさんのレポートをご紹介します。

2014年の10月末にロンドンから少し離れたレディング大学に、国際交流プロジェクトの一環として8日間行ってきました。3年の春に就職について考え始め、自分は書体のデザインがしたいと思い、レディング大学で文字が学べること、ムサビの後藤吉郎先生がその大学を出られていることを知りました。後藤先生に会いに行き、今回参加したタイポグラフィとコミュニケーション・デザイン・プロジェクトがあることを教えてもらい参加を決めました。

レディング大学は美大ではなく総合大学です。その中にタイポグラフィ学科があり、そこでデジタルフォントをデザインするタイプフェイスデザイン・コースとコミュニケーションデザイン・コースの授業に参加しました。今回は視覚伝達デザイン学科の4年生が4人で参加しました。私以外の3人はタイプフェイスデザインというよりは海外で勉強をしたいという興味からでした。メインとなった課題は、オリジナルのタイプフェイスデザインを作る実技で、4人に異なるテーマが与えられて、私は手書き文字になりました。アル

ファベット26文字をその場で作るのは難しいので、8文字だけを現地で制作し、帰国後に残りを完成させて、データで送って講評してもらいました。それ以外は、タイプフェイス、タイポグラフィ、ダイアグラム、ブックデザインなどグラフィックデザインの講義を聞きました。講義は英語で受けました。

最初は専門的な用語が多くて何を言っているか分からなかったりしましたが、耳で聴くだけの英語の授業ではなく、自分の興味のある分野でし実物を目の前にして解説してもらったので、単

語の意味が少し分からなくても、こういうことを言っているんだろうと想像しながら聴くことができました。ホテルに帰ってから、何を言っていたか調べるなど、英語の復習もしました。また、資料が豊富で、日本では本の中でしか見たことがないようなデザインの原本があり、すごく驚きました。活字を作るモノタイプ鋳造機が置かれていて、その職人さんに実演してもらった授業があり、こんな体験は人生で一度きりだろうって現地の先生から言われましたが、本当に来てよかったと思った瞬間でした。

授業を受けたメンバーの国籍も様々だったので、日本の授業では聞くことができない、日本についてのイメージとか、タイポグラフィに対するそれぞれの国の考え方を感じ取ることができたのも大きな経験でした。



2015年1月に「Globalize!」(<http://global.musabi.ac.jp>)に掲載した内容を改稿して掲載しています。

REPORT 09 : 国際交流プロジェクト



国際ワークショップ Global Design Initiative

ケルン・インターナショナル・カレッジ・オブ・デザイン（ドイツ）、ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校（ロンドン）、ラサール・カレッジ・オブ・アート（シンガポール）、実践大学（台湾）、そして本学が持ち回りで主催する国際ワークショップ「Global Design Initiative (GDI)」。

2016年の3月にドイツのケルンで開催されたGDIへ参加した視覚伝達デザイン学科の宮崎日向子さんに話を伺いました。

GDIを知ったのは、1年生の時でした。デザイン情報学科の長澤忠徳教授（現学長）の「Interactive Innovation」という全て英語で行われる授業へ先輩と参加し、GDIというおもしろい取り組みがあるということを紹介してもらったのがきっかけです。

GDIに参加するメンバーには、事前に自己紹介ムービーを作成する課題が出されました。作成後、インターネットで公開され、参加メンバーはケルンで集まる前にお互いのことを知ることができました。現地では、ケルン・インターナショナル・カレッジ・オブ・デザインの教授がプログラムの進行を務め、5大学の教員が相談して決めたテーマは「デザイン・ストレンジネス」でした。学生は1チーム5人の3グループで活動し、まずワークショップの導入として街中にある「ストレンジ」なものを探しに行きました。

チームでズートシュタッド地区を歩き回った時に、街中にパイプが設置されているのを見つけました。これは何だろうという疑問を持ち、地元の人にインタビューをす

ると、この長いパイプは地下鉄工事により地盤沈下した事故現場に溜まった水をライン川に排出するものでした。現地でヒアリングしたところ、このパイプはネガティブなものだけど、残すことでの事故を忘れないことが一番大切だという人がいて、妙に納得できました。その地盤沈下の現場にポストイットなどを貼り、コメントを書けるようにペンを置きました。現地の人が

興味を持ってくれるか不安でしたが、割と街行く人がコメントを記入してくれて、パブリックにおける人々の反応は、日本と違いポジティブなのかなと思いました。

GDIに参加し、ものごとを多面的にとらえるということがわかったのと、やろうかやるまいか、迷うぐらいならやろうと思えるようになりました。また、討論の時、海外の学生は物怖じせずどんどん議論をぶつけ合いますが、とすると議論がまとまらないことがよくあります。そんな時にはこの議論をどのようにまとめるかということを考えていました。そういうある種の協調性のようなものはとても大事だと思ったので、将来海外で仕事をするとなった場合には、そういう部分も意識しながらやっていければと思いました。



2016年5月に「Globalize!」(<http://global.musabi.ac.jp>)に掲載した内容を改稿して掲載しています。

REPORT 10 : 国際交流プロジェクト



クリエイティブデザインキャンプ

2016年の春、中国の浙江工商大学芸術設計学院、浙江大学城市学院、そして本学が参加し実施された「クリエイティブデザインキャンプ」。それぞれの大学が「We:わたしたち」をテーマに、発展するインターネット環境とともに変化する人間関係に対し、新しいシステムとサービスを考え、5月28日に中国・杭州でプレゼンテーションを行いました。この取り組みについて、本学側の責任者を務めた工芸工業デザイン学科IDコースの中原俊三郎教授に話を伺いました。

浙江工商大学は商業系の大学、協賛した現地企業のアリペイは金融決済サービス領域での強みを持っています。同大学からはアリペイに就職する卒業生もいるなど、つながりがありプロジェクトが実現しました。今回、このテーマに工芸工業デザイン学科IDコースが参加することを、一見不思議に思う方もいるかもしれませんが、現在のID業界では、プロダクトデザインに加え、「かたちのないコトのデザイン」に拡大しています。つまり、モノではなくて、サービスなどをデザインするという領域にアプローチしている。だからよく考えると不思議なことではないんです。

本学の4チームは、ファッション、食生活、寄付に関するサービスと決済システムの提案を行いました。ファッションをテーマとしたものは、通販で服を買う時にまるで試着して選んだかのようなコーディネートができるアプリの提案。しかも環境設定ができるので風が吹いた時の服の揺れ方でイメージできるような提案でした。次に食生活に関するものでは、学食利用や自

炊の状況をアプリで管理することで、日替わり定食や最近の食事傾向から利用者にとっての最適な栄養管理を実現するというもの。もうひとつの食生活の提案は、コンパや宴会等を企画する幹事をサポートする提案で、様々な条件に見合う会場や演出をアプリとともに決めて行きます。4つ目は寄付に関するもので、思い立った時に自分の買い物金額に自分の決め

た金額分を上乗せして寄付できるというサービスと決済システムの提案で、しかも寄付をした実感と貢献度が可視化されるというものでした。本学学生の提案は細かいところまで気がつくことができる、着眼点の良さが光っていたと思います。

語学力は当然大事だけれども、こういった取り組みは、お互いの言語の壁を越えてやり取りをすることで学べる人が多い。現在、様々な分野の仕事で「デザイン力」が必要とされています。今回のプロジェクトは学生にとって貴重な体験だったと思います。浙江工商大学は、キャリア教育に力を入れている総合大学です。そのスケールの大きさから、多角的な教育マネジメントは大変参考になります。今後も友好関係を深めていきたいと考えています。



2016年6月に「Globalize!」(<http://global.musabi.ac.jp>)に掲載した内容を改稿して掲載しています。

REPORT 11: 国際交流プロジェクト



Craft Design development at Sorsogon, Philippines

2016年の7月から8月にかけての10日間、フィリピンで実施された国際交流プロジェクト「Craft Design development at Sorsogon, Philippines」。このプロジェクトの代表を務めた、基礎デザイン学科の板東孝明教授と工芸工業デザイン学科インテリアデザインコースの伊藤真一教授に話を伺いました。

板東教授 今回プロジェクトを行ったフィリピン共和国ソルソゴン州は、ソルソゴン島の首都マニラから車で9時間、飛行機で1時間の距離に位置する人口15万人の町です。そのエリアのハンディクラフト製品や食品の製品価値向上のために2015年4月よりJICA青年海外協力隊員が貿易産業省の現地事務所へデザインの職種で派遣されています。

伊藤教授 今回のプロジェクトは、その隊員と現地事務所との連携によって本学の学生が現地の生産者と直接やり取りを行いながら製品のデザイン及びプロモーションデザインを行うものです。今回の渡航では生産者の要望もあり、マンゴの葉を使用した草木染や、現地のピコール大学の学生とともに、デザインの力を認識する体験としてBamboo Dome建設のワークショップを実施しました。

生産者からのヒアリングの過程では、フィリピンにおけるクラフトワークの実態調査として現地の7箇所の工房を訪問し、「ニト」という強靱なツルをバスケットに加工する工房や日本の竹素材のようにしなやかで丈夫な「カラゴモイ」という素材でバ

スケルトなどの編み物を加工する工房などを見学。様々な素材に触れることでナチュラルプロダクトに関するブランディングについての問題点や改善点などを探り、また公共交通機関を使って行くことが困難な村での生産者の生活を垣間見ることができ、学生にとって大変貴重な経験となりました。

板東教授 今回のプロジェクトを経て、将来的にデザインを通じて国際協力をするような仕事、青年海外協力隊に行きたいと言っている学生もいます。今回は10日間の短い経験ですが、現地で生きる人々の目線に立って物事を考えるきっかけができたのではと思います。

伊藤教授 ピコール大学でのグループセッションでは手工芸の生産者の方々と交えて、デザインの可能性につ

いてのディスカッションや最初のアイデア出しを行いました。ピコール大学の学生と本学の学生の間でデザインの進め方に大きな違いがありますが、調査能力が高い彼らと今後オンラインでやり取りをしながら製品化に向けてデザインを進めています。

板東教授 参加学生は、今回のプロジェクトを通じて支援プロジェクトの考え方やフェアトレードなどのリアリティを感じることができました。この「リアリティ」は、当たり前ですが現地でないと経験できません。地産の素材から製品が立ち上がっていく様子に触れたことは、デザインへの大きな刺激になったと言えます。フィリピンにおけるプロジェクトは始まったばかり、現地での経験をもとに、学生たち共々、新たなデザインを提案していかなければならないと感じています。



2016年10月に「Globalize!」(<http://global.musabi.ac.jp>)に掲載した内容を改稿して掲載しています。

REPORT 12: 国際交流プロジェクト



国際アートキャンプ Tropical Lab

大学院造形研究科修士課程美術専攻の戸井李名さん（油絵コース）と細井えみかさん（彫刻コース）が2016年7月から8月にかけてシンガポールで行われた国際アートキャンプ「Tropical Lab」に参加しました。世界の主要な美術大学の学生が集い、滞在制作と展示発表を行った2人に現地での体験を対談形式で語っていただきました。

——「Tropical Lab」とは、どんなプログラムですか？

細井 シンガポールのラサール・カレッジ・オブ・アートが主催し、世界中の美術大学から学生を集め、制作、展示を行う国際アートキャンプで、今回で10回目になります。

戸井 今回参加した学生は全部で28名。シンガポール、アメリカ、スイス、イギリス、香港、インドネシア、ニュージーランド、モンゴル、オーストラリア、タイ、セルビア、そして日本と、国や地域も様々でした。

細井 期間は約2週間で、前半はシンガポールを知るためのツアーが組まれ、その経験をもとに残りの期間で制作し、大学のギャラリーを借りて展示を行いました。

——現地では作品の制作方法など、海外と日本の違いは感じましたか？

戸井 国によって制作スタンスがまったく違うところが新鮮でした。日本人が作るものは繊細でクオリティは高いけれど、ほかの国の人は作品自体よりもコンセプトを

——この経験を今後どのように活動していこうと考えていますか？

細井 シンガポールでは制作期間が短く、それまで制作にありったけの時間を使っていた自分にとっては良いトレーニングになりました。また、育った環境や言語の違う人と交わることは大きな意味を持つと身を以て感じたので、今後もアーティスト・イン・レジデンスなどに積極的に参加し、自分の蓄えにしていきたいと思っています。

戸井 様々な国のあり方や文化の違いに触れることで、日本について、自分の考え方やルーツについても再確認し、より深めることができました。その気づきを制作活動に活かすのはもちろん、言葉でのコミュニケーションがどれだけ大切かも実感できたので、語学の勉強にも力を入れていきたいです。

重視していて、日本にいたら当たり前過ぎて気付かなかったことを再認識できたね。世界で発表する上で自分の何を伸ばしていけばいいのか、日本人として生まれ育ってきた私自身の考えや、自分の作品を深く突き詰めていくなかになったと思っています。

細井 私は影響されやすい人間なので、自分が持っていたあらゆる感覚がすべてひっくり返されるような毎日でした。私が当たり前だと思っていたこと、例えば一定ラインまで作品のクオリティを持っていかないと恥ずかしくて見せられないという感覚も、彼らからしたら「それって日本人っぽいね」なんです。

参加者のひとり、画家として自国のメディアにも紹介されているような子でしたが、作品が未完成のままだったので話を聞くと、「時間が足りないからやめた」って。そんなことあるの!? って、びっくりしました。

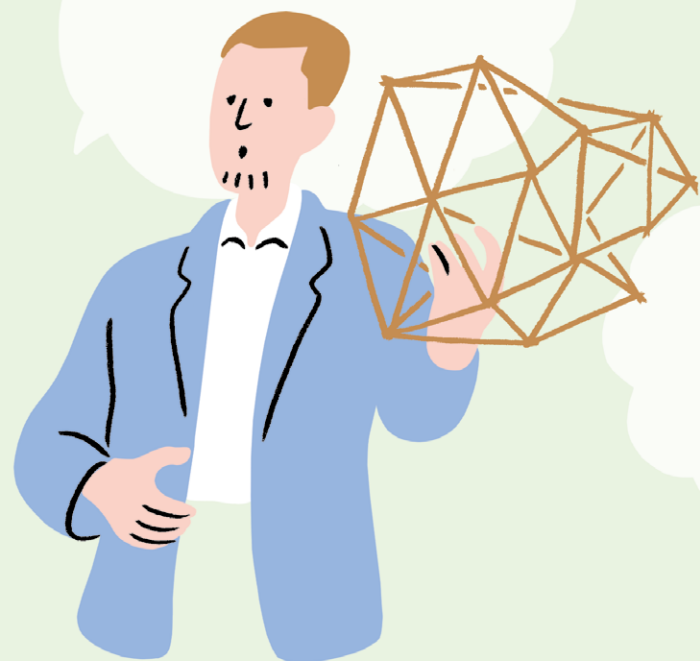


2017年4月に「Globalize!」(<http://global.musabi.ac.jp>)に掲載した内容を改稿して掲載しています。

Chapter 3

LEARN GLOBAL

世界をまなぶ



英語による授業や訪問教授など、 キャンパスで世界を体験する

海外での活動には外国語の習得が欠かせない条件となってきます。本学のグローバル人材育成プログラム開始前は、語学科目以外に“英語で行う”授業は2科目のみしか開設されていませんでしたが、グローバル人材育成プログラム開始後は、約50科目へと大きく増加しました。登録した学生の全員が全てを理解出来ないとしても、日本語以外での理論系科目、実技系科目に触れることは新鮮であり、また興味の幅を広げることにもなり、言語が“勉強”からコミュニケーション手段（ソフト・ツール）となるのは、視覚先行の本学学生にとって、大きな価値観の転換を促すことになりました。

また、海外の第一線で活躍するアーティストやデザイナー、研究者が本学キャンパスで講義を行う「訪問教授」も、その招聘人数は増加しており、留学などの足掛かりとして、海外での学びを体験できるきっかけになっています。

より身近な海外との接点として、昼休みを利用し、学生や卒業生などの留学経験者や国際交流プロジェクト参加者の報告などを聞く企画「ランチトーク」があります。学生目線で語られる体験談は、海外を目指す学生にとっては参考になり、良い刺激にもなっています。

外国語教育の 新たな試み

英語で行う授業の例

授業 1

Seminar in Psychology IIIA

紙媒体による教育ゲームの開発を行う授業で、講義をはじめ学生同士のグループワークなども英語で進めています。前半は、市販のゲームを体験することで、その構造やルールがどのような体験を引き起こすかを理解し、後半は、ゲームにする社会現象を設定し、それをゲームとして再現することを目指します。学生にも馴染み深いゲームを題材に、楽しみながら英語を身につけます。



授業 2

Seminar in Law Legal Issues in Films

法に関する問題を取り上げた映画には良作が多くあるため、法的問題を知ることができる映画を英語で観ます。上映前にその映画に出てくる法的問題に関するキーワードや解説を行い、上映後には初歩的な英語でディスカッションを行います。日本の法律は、欧米を参考にして作られたものが多いため、欧米の法学用語の使われ方などを、映像を通じて知ることその理解に役立てます。



英語で行う授業の一覧（2016年度）

文化総合科目	科目区分	授業名	対象学年
全学科対象	I類	International Relations II	1・2・3・4年
	II類	Seminar in Psychology III A	1・2・3・4年
	II類	Seminar in Law II	1・2・3・4年
	II類	Health and Physical Education 33 (basketball)	1・2・3・4年
	II類	Health and Physical Education 34 (basketball)	1・2・3・4年
	II類	Health and Physical Education 39 (basketball)	1・2・3・4年
	II類	Health and Physical Education 40 (basketball)	1・2・3・4年
学科別科目	科目区分	授業名	対象学年
日本画学科	I類選択必修	Fundamental Subjects for Art and Design	1年
	II類選択	Art & Communication I	1・3年
	II類選択	Art & Communication II	1・3年
油絵学科油絵専攻	I類選択必修	Fundamental Subjects for Art and Design	1年
	II類選択	Art & Communication I	1・3年
	II類選択	Art & Communication II	1・3年
油絵学科版画専攻	I類選択必修	Fundamental Subjects for Art and Design	1年
	II類選択	Art & Communication I	1・3年
	II類選択	Art & Communication II	1・3年
彫刻学科	I類必修	Sculpture H b	3年
	I類必修	Sculpture I b	3年
	I類必修	Sculpture J b	3年
	I類必修	Sculpture K b	3年
	I類必修	Sculpture L b	4年
	I類必修	Sculpture M b	4年
	I類選択必修	Fundamental Subjects for Art and Design	1年
	卒業制作	Graduation Work b	4年
	II類選択	Approaches to 3D Form I	3年
	II類選択	Approaches to 3D Form II / Hand vs Generation:Approaches to 3D Form	3・4年
視覚伝達デザイン学科	II類選択	THE VIRTUAL FORM I	1・2年
	II類選択	THE VIRTUAL FORM II	1・2年
	II類選択	Art & Communication I	1年
	II類選択	Art & Communication II	1年
	II類選択	Basic Skills of Critique & Presentation	1・2年
	I類必修	設計計画IV	4年
	II類選択	Environment Planning	2・3・4年
	基礎デザイン学科	Design Project E	2・3・4年
	I類選択	CG演習A / CG演習I A	2年
	I類選択	CG演習B / CG演習I B	2年
映像学科	II類選択	Audio Art	1・2・3・4年
	I類選択必修	Curatorial Practice	3年
	II類選択	Basic English for Art & Design / Advanced Learning of Contemporary Art	1・2・3・4年
	II類選択	Museum Study & English Communication	3・4年
	I類必修	Introduction to Design Informatics II - B	2年
	II類選択	Contextual Studies-2	2・3・4年
	II類選択	Interactive Innovation-2	2・3・4年
	II類選択	デザインテーマ研究III -Db	2・3・4年
造形総合科目	科目区分	授業名	対象学年
全学科対象	II類	Bamboo Designing	2・3・4年
	II類	THE VIRTUAL FORM I	1・2年
	II類	THE VIRTUAL FORM II	1・2年
	II類	Environment Planning	2・3・4年
	II類	Design Project E	2・3・4年
	II類	Contextual Studies-2	2・3・4年
	II類	Interactive Innovation-2	2・3・4年
	II類	Theoretical Studies on Design Theme III -Db	2・3・4年
	II類	Sculpture k A	3・4年
	II類	Information Representation I F	1・2・3・4年
	II類	国際交流プロジェクトI -1	1・2・3・4年
	II類	国際交流プロジェクトI -2	1・2・3・4年
	II類	国際交流プロジェクトI -3	1・2・3・4年
	II類	国際交流プロジェクトI -4	1・2・3・4年
	II類	国際交流プロジェクトII -1	1・2・3・4年
	II類	国際交流プロジェクトII -2	1・2・3・4年
	II類	国際交流プロジェクトII -3	1・2・3・4年
	II類	国際交流プロジェクトII -4	1・2・3・4年

授業 3

美大生のための英語講習会

自らの言葉で、自身の作品を海外に向け発信するのに必要な「英語力」の向上を目標とし、英会話スクールの講師が、効果的なプレゼンテーション方法を分かりやすく伝授。3日間の集中講座で、実践的な英語を身に付けることができる貴重な機会です。授業は、参加者のレベルに合わせた英語で行われ、プレゼンテーションスキルのみならず、リスニング力やスピーキング力を向上させます。

訪問教授



訪問教授リスト

《2012年度》14名

James Auger (イギリス)	Royal College of Art講師、デザイナー
Timon Screech (イギリス)	ロンドン大学アジア・アフリカ研究院 (SOAS) 教授、日本美術史家
Segismundo Engelking (メキシコ)	メキシコ首都自治大学教授
Christopher Toh (シンガポール)	クリエイティブ・ディレクター
J. Morgan Puett (アメリカ)	デザイナー
Paul Asenbaum (オーストリア)	キュレーター、美術史家、アート・コンサルタント、Decorative Arts Consultant 主宰
Philip Samartzis (オーストリア)	サウンドアーティスト、ロイヤルメルボルン工科大学 (RMIT) 准教授
Dudy Wiyancocko (インドネシア)	バンドン工科大学 准教授
曾隆雄 (台湾)	雲林科学技術大学教授
Hinrich Sachs (ドイツ)	スウェーデン国立芸術大学教授
Imogen Teresa Stidworthy (イギリス)	メディア・アーティスト
Raman Schlemmer (ドイツ)	Oscar Schlemmer Archive ディレクター
Andrea Batorfi (ハンガリー)	写真家、美術史家

《2013年度》15名

Stephen Jones (イギリス)	Millinery (帽子デザイナー)、ロンドン芸術大学名誉教授
Birgit Mager (ドイツ)	ケルン・インターナショナル・スクール・オブ・デザイン教授
Philippe Bennequin (フランス)	パリ国立高等美術学校教授
Harri Koskinen (フィンランド)	デザイナー、Friends of Industry Ltd. 主宰
Bonnie Rychlak (アメリカ)	キュレーター、彫刻家、元イサム・ノグチ庭園美術館 (ニューヨーク) 主任学芸員、プラットインスティテュート
Michael Bielicky (ドイツ)	カールスルーエ造形大学 (HfG) メディアアート学科主任教授
Edward Allington (イギリス)	ロンドン大学スレード美術学校教授、大学院彫刻科主任
Sophie Raikes (イギリス)	Henry Moore Institute 学芸員
Axel Thallemer (ドイツ)	工業デザイナー、デザインコンサルタント、リンツ芸術大学工業デザイン学科教授
Rajendar Tiku (インド)	彫刻家、元ジャムムー・カシミール (J.K.) 総合大学音楽・美術学部 彫刻専攻教授
Pandeya Rajivanayan (インド)	彫刻家、ラクナウ総合大学美術工芸大学校長、彫刻学科主任教授
Dudy Wiyancocko (インドネシア)	バンドン工科大学准教授
Reyer Kras (オランダ)	元ステデリック美術館 デザイン部門主任学芸員、アウレリウス・デザイン企画主宰
Yanawit Kunchaethong (タイ)	タイ国立シリバコーン大学 絵画 彫刻 版画学部 版画学科准教授
金畏均 (韓国)	韓国芸術総合学校 美術院 デザイン科教授

《2014年度》17名

Gerry Leonidas (ギリシャ)	レディング大学 タイポグラフィ グラフィックコミュニケーション准教授
阪根博 (日本、ベルー)	天野博物館事務局長
Fatima Miranda (スペイン)	パフォーミング・アーティスト、作曲家、歌手
Philipp Heidkamp (ドイツ)	ケルン応用科学大学文化科学学部長、ケルン・インターナショナル・スクール・オブ・デザイン 大学院教授、コースディレクター
Marianne Greber (オーストリア)	写真家、ビデオ・アーティスト
Krzysztof Wodiczko (ポーランド、米国)	メディア・アーティスト、ハーバード大学大学院 デザイン学科アート・デザイン・公共圏コース教授
上杉裕世 (日本、アメリカ)	インダストリアル ライト&マジック (ILM) シニアデジタルマットアーティスト

世界各地からアーティストやデザイナー、研究者を「訪問教授」として招き、講演や講評会、公開シンポジウムなどの多彩な特別授業を開講しています。海外の第一線で活躍する専門家に直接指導を受けることは、学生にとって貴重な機会であり、留学などを考える学生にとっては海外での学びを知るきっかけにもなっています。また、テーマを設定したワークショップや、学科の枠を超えた合同制作・講評会などの、実験的な試みもなされています。

過去5年間の招聘実績は、2012年度14名、2013年度15名、2014年度17名、2015年度17名、2016年度9名となり、教員の国際ネットワークを活かしています。

Surendra Shakya (ネパール)	美術者 (鋳物師)
Zdzislaw Schubert (ポーランド)	元ボズナン国立博物館ボスター・デザイン・ギャラリー長
Maria Kurpik (ポーランド)	前ヴィラヌフポスター美術館館長
Rebecca Wright (イギリス)	ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校 グラフィック・コミュニケーションプログラムディレクター
Rajasekharan Nair (インド)	彫刻家
Karl Antao (インド)	彫刻家
Axel Thallemer (ドイツ)	工業デザイナー、デザインコンサルタント、シンガポール国立大学教授
Peter de Kimppe (オランダ)	アムステルダム総合芸術演劇学院副校長、舞台美術学部長、教授、舞台美術家、展覧会場スペースデザイナー、建築家
山本まさと (日本、スイス)	プロダクトデザイナー、デザインコンサルタント
Chris Myers (アメリカ)	フィラデルフィア芸術大学 グラフィック・デザイン学科主任教授

《2015年度》17名

KariJohannes Piippo (フィンランド)	グラフィックデザイナー、イラストレーター
Nicholas Rhodes (イギリス)	ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校 プロダクト、セラミック、インダストリアルデザイン プログラムディレクター
Albano Afonso (ブラジル)	ビジュアルアーティスト、アトリエ・フィダルガ主宰
Qu Feng Guo (中国)	アーティスト、上海戯劇学院創意学科教授
Andrew Basile (アメリカ)	Basile Creative Services代表、クリエイティブ・ディレクター
Edward Allington (イギリス)	彫刻家・ロンドン大学スレード大学院教授
Sophie Raikes (イギリス)	ヘンリー・ムーア・インスティテュート 学芸員
Sophie Krier (ルクセンブルク公国)	デザイナー、サンドバーク美術大学院教授
Michael Bielicky (ドイツ)	カールスルーエ造形大学メディアアート学科主任教授
川俣正 (日本)	フランス国立高等美術学校教授
Ian Woo (シンガポール)	画家、ラサール・カレッジ・オブ・アート シニアレクチャラー、美術研究科プログラムリーダー
Laurence Madrelle (フランス)	LM communiquer代表
Enric Massip Bosch (スペイン)	建築家、EMBA建築設計事務所代表、カタロニア工科大学准教授
Roberto Feo (イギリス)	ロンドン大学ゴールドスミス校デザイン学科教授、ロイヤル・カレッジ・オブ・アート デザイン・プロダクト学科講師
Rosario Hurtado (スペイン)	ジュネーブ造形芸術大学スペース&コミュニケーション 学科教授、ロンドン大学ゴールドスミス校講師
山田正好 (日本)	彫刻家

《2016年度》9名

Kate Burnett (イギリス)	舞台美術家、展示デザイナー、ノッティンガム・トレント大学 舞台美術研究者、舞台美術学部統括者、博士課程教授
Patricia Ann Austin (イギリス)	ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校 空間演習プログラム リサーチリーダー、博士課程スーパーバイザー/MA ナラティブ・エンバイロメント コースリーダー
Chen Qiang (中国)	中国上海市建峰学院芸術学部副教授
Scott Eaton (アメリカ)	Eaton Media Limited ディレクター
Rebecca Wade (イギリス)	ヘンリー・ムーア・インスティテュート研究員
Laurence Madrelle (フランス)	LM communiquer代表
Ingrid Ledent (ベルギー)	アントワープ王立美術学院教授、アーティスト
Scott Darlington (アメリカ)	Pratt Fine Arts Centerスタジオマネージャー、ガラスアーティスト
Philip Samartzis (オーストラリア)	ロイヤルメルボルン工科大学芸術学部准教授



ランチトーク

海外での活動に関心のある学生などを対象に“昼食持ち込みの懇話会”＝「ランチトーク」を月1回程度の頻度で開催しています。留学など海外で学びたい、制作をしたいと考える学生が、実際に海外で活動するには何が必要かを知るために、留学や国際交流プロジェクトに参加した学生や本学への交換留学生、また海外で実際に働く卒業生などをスピーカーに迎え、その経験を伝えるものです。昼休みという限られた時間ですが、昼食を摂りながらのカジュアルな雰囲気の中、学生と同じ目線で語られる言葉を参考にしながら、海外での活動についてのきっかけを探る場となっています。

「ランチトーク」実績

《2012年度》

異文化の中で自分を試すということ
スピーカー：小田川 愛さん (2008年度空間演出デザイン学科卒業)

国際協力と美術・デザインーガーナでの体験からー
スピーカー：伊藤真一准教授 (工芸工業デザイン学科)

東南アジアの美大・芸大事情についてータイでの体験からーPART2
スピーカー：高浜利也教授 (油絵学科版画専攻)

東南アジアの美大・芸大事情についてータイでの体験からー
スピーカー：高浜利也教授 (油絵学科版画専攻)

英語圏の学校にいくことについてー言語文化の先生3人とのQ&Aー
スピーカー：Paul Kandasamy教授・相原優子准教授・小澤智子准教授 (言語文化研究室)

だから今、世界進出
スピーカー：長澤忠徳教授 (デザイン情報学科)

《2013年度》

Ooh la la〜! フランスで驚いたこと!
スピーカー：徳永陶子 (1990年度油絵学科)

ヘリウムより軽いファットワークで
スピーカー：小池浩央 (2005年度修士課程映像コース修了)

“国際的”に活動を行うとは?
スピーカー：梶田ちひろ (2003年度修士課程油絵コース修了)

異文化コミュニケーションー実践編ー
スピーカー：相原優子准教授・小澤智子准教授 (言語文化研究室)

自分の環境の用意の仕方
スピーカー：菊池藍 (2011年度基礎デザイン学科卒業)

そこが自分の街になる
スピーカー：小林つぶら (2010年度修士課程基礎デザインコース修了)

アーティスト・サバイバル編 in NY
スピーカー：キノマホ (1984年度短期大学部グラフィック専攻卒業)

未知なる光と匂いを味わうために
スピーカー：三本松淳 (2001年度映像学科卒業)

海外で肝っ玉を強くする方法
スピーカー：吉田由依子 (本学卒業生・空間演出デザイン学科2009年度卒業)

異文化コミュニケーションー実践編ー
スピーカー：相原優子准教授・小澤智子准教授 (言語文化研究室)

とにかく歩く。見えてくるもの。そして出会うこと。
スピーカー：橋口博幸 (建築学科非常勤講師・2005年度基礎デザイン学科卒業)

異文化コミュニケーションー実践編ー
スピーカー：Paul Kandasamy教授・相原優子准教授・小澤智子准教授 (言語文化研究室)

《2014年度》

なぜ、海外なのか
スピーカー：木島孝文 (2000年度大学院造形研究科修士課程美術専攻日本画コース修了)

えげれずもじもじのすすめ
スピーカー：大曲都市 (2007年度視覚伝達デザイン学科卒業)

英語の話をしない石黒がシンガポールで3週間のアートプログラムに参加して言語の壁を登ってみた。
スピーカー：石黒ゆかり (大学院造形研究科修士課程美術専攻油絵コース2年)

Tropical Princessに恋してーGo WestからFind Eastへ
スピーカー：成清北斗 (大学院造形研究科修士課程美術専攻彫刻コース2年)

マイノリティを楽しむーArtist Life in Londonー
スピーカー：杉浦亜由子 (2006年度彫刻学科卒業)

無計画な計画のすすめ
スピーカー：角文平 (共通デザイン研究室非常勤講師・2001年度工芸工業デザイン学科卒業)

新しい価値観を「受け入れる、理解する、楽しむ」!!!
スピーカー：斎藤清香 (2011年度空間演出デザイン学科卒業)

《2015年度》

ムサビを卒業してニューヨークで働く
スピーカー：野部聡子 (2001年度基礎デザイン学科卒業)

あなたの代わりに ニュージーランドに住んで来ました
スピーカー：丸山亜由美 (基礎デザイン学科2年)

芸術は世界を救う!
スピーカー：岡部千晶 (大学院造形研究科修士課程美術専攻油絵コース1年)

英語だけでは武器にならない
スピーカー：大本友里加 (基礎デザイン学科4年)

一歩踏み出して、その向こう側へ
スピーカー：郭一恵 (2014年度大学院造形研究科修士課程デザイン専攻映像コース修了)

火事場の馬鹿力ー意外外となんとかなるー
スピーカー：西島ロッテ暁子 (1998年度空間演出デザイン学科卒業)

一度心を打ち砕かれようー海外でもう一度確かめる自分へ
スピーカー：趙輝 (視覚伝達デザイン学科4年)

カルチャー・コミュニケーション・コラボレーション
スピーカー：若林玄 (2011年度デザイン情報学科卒業)

《2016年度》

Lunch Talk with Yoonjung Cho from Hongik University, Seoul
スピーカー：Yoonjung Cho (弘益大学校美術学部デザイン学科ビジュアルコミュニケーション専攻3年)、Mu Tzutung (デザイン情報学科3年)

Lunch Talk with Christa and Jayne from Pratt Institute, New York
スピーカー：Christa Carr (プラット・インスティテュート 2Dアニメーション専攻2年)、Jayne Linn (プラット・インスティテュート 3Dアニメーション専攻2年)

Lunch Talk with Pauliina and Henry, Aalto University, Helsinki
スピーカー：Pauliina Purhonen (アールト大学美術デザイン建築学部 陶芸・ガラスコース2年)、Henry Daly (アールト大学美術デザイン建築学部 修士課程 コラボレーティブ・アンド・インダストリアル・デザインコース1年)

Lunch Talk with Tessa Gustin from Beaux-Arts, Paris
スピーカー：Tessa Gustin (パリ国立高等美術学校3年)

一歩日本を出て、シンガポールでアーティスト活動をしてみたら
スピーカー：細井えみか (大学院造形研究科修士課程美術専攻彫刻コース1年)

ヨーロッパでアーティストとして暮らすということ
スピーカー：風早小雪 (2011年度大学院造形研究科修士課程美術専攻版画コース修了)

AiRーアーティスト・イン・レジデンス：世界のアートシーンの地平線に立つ
スピーカー：杉浦藍 (2006年度大学院造形研究科修士課程美術専攻彫刻コース修了)

ロンドンでキラキラ？ 東京でガラガラ?? 私のキュレーター修練道 in UK
スピーカー：三木茜 (2011年度油絵学科版画専攻卒業)

汚れたバンダ：北京で日本再発見
スピーカー：池崎拓也 (2004年度油絵学科卒業)

REPORT 13 : 訪問教授



アートは身体全体で生み出すもの ——

アンドレア・バトルフィ（写真家・美術史家／ハンガリー）

2013年3月下旬、ハンガリーを拠点に活動する写真家・美術史家、アンドレア・バトルフィさんを「訪問教授」に迎えたワークショップには、春休みにも関わらず多くの学生が参加しました。横山大観など近代の日本画に影響を受け、ハンガリーと日本の自然観の共通性に着目し、写真家として活動するアンドレアさん。今回は、西洋と東洋の美術史をつなぐ視点に関する講義と、瞑想を通じて自然との一体感を得るワークショップや写真のワークショップが行われました。



アンドレアさんに聞きました！

学生たちが世界で活躍するために必要なことは？

日本人には深い思想や知恵が備わっていると思います。その感性や感覚は世界的にみてもとても素晴らしいことだと思います。それぞれが自分の中にある精神性や古来からの知恵を発見することができれば、現代的な手法でそれを表現していくことができるはずです。別にお坊さんになれてことではないですよ(笑)。精神的な部分など自分を知り、確立していくことで、より世界へと発信することができるのではないでしょうか。自分の中の軸や重心を根付かせることでより成長することができると思います。言葉ではなくて、心でも通じ合うことができます。素晴らしい知恵や精神性があれば、宇宙にだって開かれていきますよ(笑)。



参加学生にも聞きました！

芸術文化学科1年
小澤優己介さん

芸術文化学科では外国のアーティストが講師として招かれるので、そういう機会に恵まれるのは嬉しいです。言葉の壁はありますが、美術にはそういう壁を超えていくようなものがある気がしていて、言葉は満足に伝わらなくても、フィーリングではつながっていることを実感できます。もちろん英語で話せるようにはなりたいたいですけど(笑)。ホームステイでカナダやオーストラリアに行ったことはあるのですが、海外でも勉強したいと思っているので、これから語学も力を入れて行きたいです。

講座情報

講師：アンドレア・バトルフィ

課外講座：

2013年3月25日

13:00～14:30

ワークショップ：

2013年3月26日～29日

10:00～12:00

学外実習：

2013年3月30日

メゾンエルメス／東京国立博物館「飛騨の円空—千光寺とその周辺の足跡」見学

プロフィール

アンドレア・バトルフィ
(ハンガリー)

写真家、美術史家、元ナショナル・ギャラリー（ブダペスト）学芸員。ブダペストの芸術宮殿において、展覧会のキュレーターを務めた後、ナショナル・ギャラリー（ブダペスト）の版画グラフィック部門の学芸員として、作品の収集保存や展覧会の組織を行う。また、写真家としては内外での個展・グループで発表を行い、1999年からはブダペストの芸術宮殿において、美術の講義や写真制作のワークショップを行なっている。

REPORT 14 : 訪問教授



グローバリズムではなくコスモポリタンに ——

ラマン・シュレンマー（オスカー・シュレンマー・アーカイブ ディレクター）

2013年3月にお越しいただいた訪問教授のラマン・シュレンマーさん。20世紀のモダンデザインに大きな影響を与えたドイツの芸術学校「バウハウス」で教鞭をふるったのがラマンさんの祖父オスカー・シュレンマー（1888～1943）です。ラマンさんは、画家、彫刻家、舞台美術家であった祖父の作品管理や研究をしながら、展覧会の企画なども行っています。今回は「オスカー・シュレンマーの作品と日本美術」をテーマに、日本での展覧会を企画するというワークショップを学生と行いました。

ラマンさんとともにワークショップを行ったのは新見隆先生の芸術文化学科研究室です。初日にはオスカーさんの代表作である「トリアディック・パレエ」を鑑賞。幾何学的な構成の舞台上を、カラフルで童話の登場人物のような衣装をまとったダンサーが、機械的に（時に音楽に合わせて）踊る、この独創的で実験的ともいえるパレエ作品から連想される日本の美術を学生たちは考えます。そして、2日目のこの日がその発表です。新見先生の授業は英語がベースで行われています。なので当然発表も英語。たとえどしくも、自分の言葉を英語で伝えるコミュニケーション・スキルを身につける鍛錬の場となっているようでした。学生たちは3人ずつ6グループに分かれ、それぞれ図書館などで資料にあたり、『トリアディック・パレエ』に通じる日本美術を探し出しました。ダンサーの衣装や造形、動きに着想を得て、着物やこけし、からくり人形、日本を代表する舞踏家・土方巽やファッションデザイナーのイッセイミヤ

ケ、また、舞台に配された幾何学から江戸時代の画家・仙崖や伝統的な文様である青海波など、学生独自の視点でオスカー・シュレンマーの作品を切り取り、そこで彼らは自国の文化を再発見することになりました。ラマンさんは学生たちとのやりとりの中

で、国際化する社会について、「グローバリズム」は均一化をイメージさせるから、それぞれが様々な背景を持った個性を尊重する「コスモポリタン」という言葉を使いたいと話されました。独自の風土や環境に育まれた日本の文化や美術、また同様に海外の文化も土地に根ざしたものであるはず。日本にいながら世界の情報にアクセスできる学生たちが見失いがちな価値観を、オスカー・シュレンマーの作品を介して気づかせてくれたのではないのでしょうか。それは今後、美術や文化といったフィールドで活動して行く上で、作品の見方や考え方の大きな指針となるはずです。

講座情報

訪問教授：ラマン・シュレンマー

課外講座：2013年3月25日 15:00～16:30

ワークショップ：2013年3月26日～29日 14:00～16:00

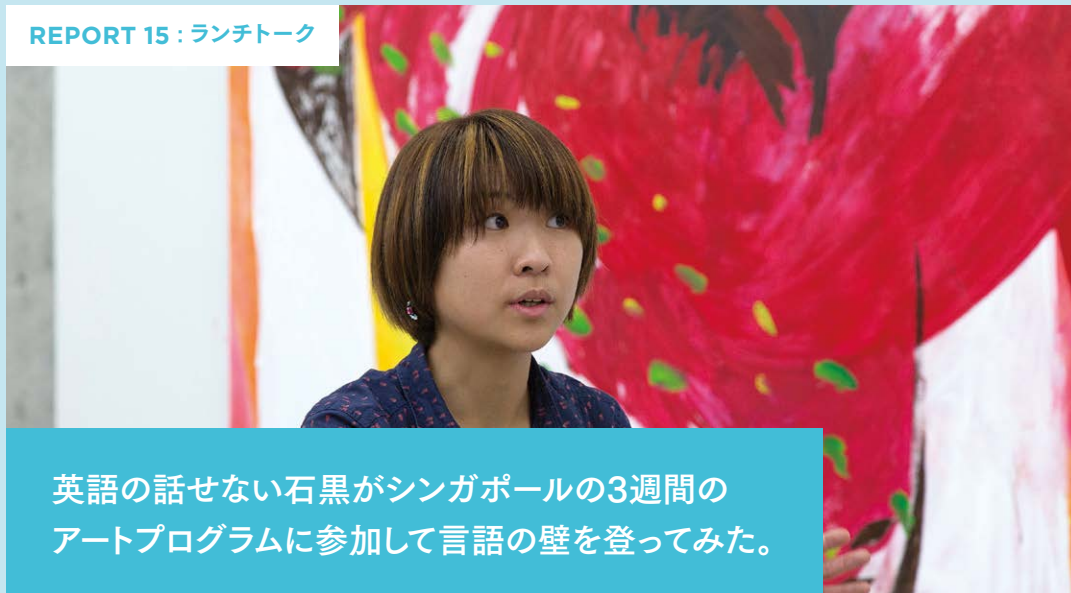
学外実習：2013年3月30日 メゾンエルメス／東京国立博物館「飛騨の円空—千光寺とその周辺の足跡」見学

プロフィール

ラマン・シュレンマー（ドイツ）

オスカー・シュレンマー・アーカイブ ディレクター。バウハウスで活躍した祖父である画家・彫刻家・舞台美術家のオスカー・シュレンマーの遺族コレクション・アーカイブを主宰しながら、ヨーロッパ各地で数々のシュレンマー関係の展覧会、パレエ上演についての企画・監修を行う。

REPORT 15 : ランチトーク



英語の話せない石黒がシンガポールの3週間のアートプログラムに参加して言語の壁を登ってみた。

2014年10月10日に行われたランチトークは、シンガポールで開催されたアートプログラム「Tropical Lab」に参加した、大学院・油絵コース2年の石黒ゆかりさんをスピーカーに迎え、「英語の話せない石黒がシンガポールの3週間のアートプログラムに参加して言語の壁を登ってみた。」が行われました。ランチトークの後、石黒さんに話を伺いました。

——ランチトークでは、自己紹介として「旅するムサビプロジェクト」での活動についてお話ししていましたが、「Tropical Lab」の話も、ちょうどその活動中に届いたそうですね。

「旅するムサビ」は学校の課外活動ですが、小・中学校や高校で作品の展示や制作をしたり、美術館の教育普及をお手伝いしたり、美術を通じてコミュニケーションをはかるようなプロジェクトです。今年からは地域の中での活動も始まり、最初に「Tropical Lab」の話を頂いた時は、長野で視察をしている最中で、突然、丸山（直文）先生から電話がかかってきました。「私、何かしたかな!？」って（笑）。「Tropical Lab」の話を頂いた時は悩みました。やはり言語のことが頭にあったので。でも、実際にシンガポール行きが決まるのは受け入れ先のラサール・カレッジ・オブ・アートの選考を経てからなので、宝くじを買うようなつもりでエントリーしてみました（笑）。軽い気持ちだったはずが、ラサールへ送る英語のプレゼンテーションとCV（履歴書）がとても大変で（笑）。英

語は話せないけど、熱意だけは伝わればと思って作りましたね。

——現地では英語のみの会話で、今回のランチトークでも言語の壁というタイトルが付きましたが、参加して語学について思うことはありましたか？

やっぱり英語が話せたらって改めて思いました。感謝の言葉がひとつしか言えないというのが辛くて。みんなに対してこんなに感謝の思いがあるのに言えないというもどかしさ。日本で英語を学んでいて

も、何か思いを伝えたいという状況にはならないし、語学は伝えることが大切だと思います。

——「Tropical Lab」終了後も、ルームメイトだった中国のユナさんやシンガポールの学生の方との交流が続いているそうですね。

行く前に考えていたのが、次につなげたいということでした。現地での2週間で何ができるかは分からなかったのですが、ターニングポイントになる確信がありました。制作面では次へのステップにするつながりを得ること。また、今回は世界中から人が集まるので、世界のことが知りたいと思いましたし、人とのつながりを次に活かしたいと考えていました。今は、中国のユナと一緒に展示をしようって話しています。



2014年11月に「Globalize!」(<http://global.musabi.ac.jp>)に掲載した内容を改稿して掲載しています。

REPORT 16 : 外国語教育

美大生のための英語講習会



8月に実施された「美大生のための英語講習会」へ参加した、工芸工業デザイン学科の向井詩織さん。英語講習会に参加する前後でのご自身の変化や今後に向けての目標などについて話を伺いました。

——参加しようと思った理由は？

あの有名な英会話スクール「ベルリッツ」の講師がムサビに来てくれること、3日間の集中講座でプレゼン力を上げるという内容が、新鮮で面白そうだったからです。過去の講習の様子をムサビのサイトで見て、少人数制で内容もかなりしっかりしている点にも惹かれました。

——事前課題もありましたが、講習までに準備したことなどはありますか？

これまで英語でのプレゼン経験はほとんど無く、スピーチ内容を考えてくる事前課題は、正直どうすればいいか分かりませんでした。講習会を担当する国際チームから送られてきたファイルに、プレゼンの例文が載っていたので、とりあえず、話すことを決めて、後は例文に沿って文を組み立てていきました。今回の講習では、学科の課題で作った作品をテーマに取り上げ、講評で話したことを簡潔にし、簡単な英文でまとめました。例文には、ちょっと覚えづらい言い回しなどもあったので、その部分の文法を確認したり、分からない単語や、自分の作品に関係しそうな単語を

調べたりして、講習に備えました。

——講習会に参加する前と後での自分自身に変化はありましたか？

講習を受ける前は、英語でのプレゼンが未知のものだったので、以前に見た映画『英国王のスピーチ』や、アップルの新商品発売時のスピーチなどのイメージもあって、とても大掛かりで下準備がいる大変なもの、という印象がありましたが、講習を終えてその重苦しいイメージがだいぶ軽くなりました。大まかなアウトラインや、話し始め、終わりの決まり文句、プレゼン中に気をつけることなど、要点を絞った講習内容だったので、どうすればいいのかが捉えやすく、3日間でしたがプレゼンに慣れることができました。実際の英語力はさておき、英語でのプレゼンに不安が無くなったと思います。2回あった即興ミニプレゼンも、事前課題の時よりずっと早く文が組み立てられたので、慣れてきていると実感できました。

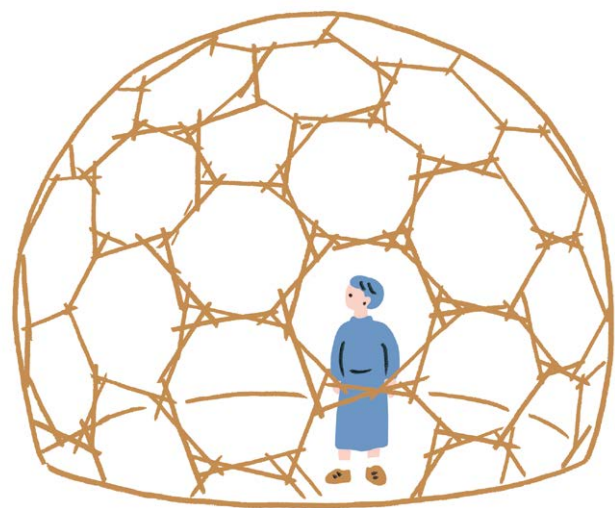
——講習会で学んだスキルを今後どう生かしていきますか？

講習内容は英語でのプレゼン力を上げるというものでしたが、普段の学科のプレゼンでも使えるような要素が多かったと思います。例えば、ジェスチャーについての講義では、プレゼン中に、前や後ろで手を組んだりするより、手を広げてスライドを示したり、強調したい言葉に合わせて手を動かしたり、プレゼンに効果的なジェスチャーを学びました。その中でも、「世界中で」という時に胸の前で両手で大きな丸を描く等、知らなかった事ばかりでした。今回学んだスキルで、これからの自分のプレゼンをもっと面白くできると思いますし、海外のプレゼンを見る時なども、その見方が変わると思います。将来的にも、きっと英語でプレゼンをする機会が増えると思うので、この講習で英語のプレゼンは難しそうというイメージが無くなって良かったと思っています。



2016年9月に「Globalize!」(<http://global.musabi.ac.jp>)に掲載した内容を改稿して掲載しています。





DATA 2012-2016

武蔵野美術大学
グローバル人材育成プログラム
中間評価・情報公開・データ

掲載データは本学が作成した『経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援（旧グローバル人材育成推進事業）事後評価調査』より転載

中間外部評価

2015年2月28日に、「武蔵野美術大学グローバル人材育成プログラム」の中間外部評価を実施しました。これは、文部科学省の中間評価とは別に、外部評価者として、保科豊巳氏(東京藝術大学 美術学部長)、野原佳代子氏(東京工業大学 留学生センター／大学院社会理工学研究科 人間行動システム専攻 教授)、矢島進二氏(公益財団法人日本デザイン振興会 事業部部長)、菅靖子氏(津田塾大学 学芸学部英文学科 准教授)の4氏を招き、本学の取り組みについて評価を受けるものです。

学長の挨拶にはじまり、本学の国際センター長より取り組みの説明が行われ、その後、評価者からの質問に回答する形で説明が補足されました。また、評価者による学生へのヒアリングも行われ、応じた学生3名は、それぞれが経験した交換留学、外国人留学生スチューデントチューター、国際交流の学生企画について話をしました。

評価者のみの審議を経て、最後に評価者より本学に講評結果が伝えられたほか、本学からも評価者へ質問を投げかけるなど、活発な質疑応答、意見交換がなされ、本プログラムの推進に多くの示唆を得る内容となりました。

外部評価者コメント



野原佳代子 氏

東京工業大学 留学生センター／大学院社会理工学研究科 人間行動システム専攻 教授

学生に聞くと、他の学術分野とは違う、芸術系大学ならではのグローバル体験を消化している。彼らなりの強烈にユニークな表現を、何らかの形で成果アウトプットに組み込んではいかがか。



菅靖子 氏

津田塾大学 学芸学部英文学科 准教授

英語で実施する授業は、産学よりも実技が多いことから、その授業科目数を誇示するのではなく、成果の詳しい内容が分かるように工夫してほしい。



矢島進二 氏

公益財団法人日本デザイン振興会 事業部部長

大学は、社会に出るまでの途中のステップの数年間ととらえ、その時期にどのようなグローバル教育を与えるのかを考えるべき。

経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援プログラム委員会における中間評価結果

大学名	武蔵野美術大学
申請区分	タイプB:特色型

総括評価	B
当初目的を達成するには、助言等を考慮し、より一層の改善と努力が必要と判断される。	

《コメント》

本事業において育成する「日本の美術・デザインを自らの言葉で海外に向け発信出来る人材」として修得すべき外国語力以外の具体的能力について、詳細を明確化し、その育成に尽力した結果、目標を大きく上回る実績を上げていることは高く評価できる。

一方で、設定した卒業時の外国語力スタンダードを満たした学生数、外国人留学生数・全学生に対する比率、協定に基づく留学プログラムにおける受入学生数・全学生に対する比率、外国語による授業の実施率、外

国人教員等比率、一定の外国語力スタンダードを満たす事務職員の割合についてはそれぞれ数値目標を下回っている。実効性の期待できる改善策の実施が計画されているが、外国語力の格段の進展のため今後一層の努力が必要である。

しかしながら、本取組を評価するに当たり、美術系大学の持つ特殊性を無視することはできない。すなわち、作品制作技術の習得そして作品自身が言葉を超えた重要性を持つ美術系大学と、言葉(記号を含む)による説明が本質である一般の大学とは一線を画す必要があると思われる。貴学は他の美術系大学に範を示すモデルケースとなる取組を実施しているという自覚を持ち、作品に全てを語らせるという基本的な方法論にとらわれず、作品について異なる文化背景を持つ外国人と英語を通じて語り合える力を育成するために努力してきたことは認められる。

美術系大学のグローバル化のため、分野の特殊性を考慮するとともに、目標の達成に向けた更なる取組が求められる。海外インターンシップの導入とその単位化、並びに専門科目の英語による授業の実施数の増加等、語学力の向上のための具体的施策を着実に実行しその成果を期待する。

Globalize! ウェブサイト

「グローバル人材育成推進事業(特色型)」に採択された2012年に、本学のグローバルな取り組みを学内外に発信するためにウェブサイトを作成し、公開しました。国際交流関連のニュースをはじめ、学内で行われる語学関連のイベントを中心に伝えるカレンダー、英語で行われる授業の一覧など、海外での活動などに関心の高い学生が必要な情報を得るための窓口となっています。また、学内で行われたイベントや国際交流プロジェクトに参加した学生や教員のインタビューを定期的にレポートしました。
<http://global.musabi.ac.jp/>



TOP

Globalize!のロゴにあわせブルーで統一したデザインと必要な情報にアクセスしやすいシンプルな構成。簡易的ではありますが英語表記によるページも用意。



英語で行う授業一覧

英語のみで行われる授業を、全学科、学年を対象とした「文化総合科目」、学科ごとの「学科別科目」などで一覧できます。各授業名をクリックするとシラバスへとリンクします。



イベントカレンダー

語学検定やTOEFL、TOEICといったテスト関連の告知や、学内で行われる留学の説明会、ランチトークなどの交流イベントの実施情報などが一覧できます。



レポート

国際交流プロジェクトをはじめ海外インターンシップ、ランチトークなど、国内外で実施される様々な取り組みを参加学生や教員の取材などを通じてレポート。

〈助成期間における事業費推移〉

(単位:円)

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	合計
補助金	72,169,514	79,850,548	70,856,198	68,222,753	47,321,285	338,420,298

〈本構想において実現する達成目標の状況〉

- ① 設定した卒業時の外国語力スタンダード(TOEFL iBT 80)を満たした学生数
- ② 卒業時における単位取得を伴う海外留学経験者数

※①、②いずれも、当該年度において学士課程最終学年に在籍する者を母数とする。

注)「海外留学経験者数」は、いずれも単位取得を伴う海外留学経験者数であり、単位取得を伴わない海外留学経験者は含まないものとする。

造形学部	平成23年度	平成24年度	平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	実績値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値
外国語力スタンダードを 満たす学生数			30人	1人	40人	3人	50人	5人	55人	4人
うち海外留学 未経験者数(A)			24人	1人	32人	2人	40人	4人	44人	2人
海外留学経験者数(B)	4人	3人	10人	10人	25人	30人	45人	33人	75人	38人
卒業[予定]者数(C)	1,032人	1,047人	1,050人	1,004人	1,050人	971人	1,050人	1,024人	1,050人	1,067人
比率((A+B)/C)			3.2%	1.1%	5.4%	3.3%	8.1%	3.6%	11.3%	3.7%

- ③ 大学の教育目的・特色を考慮して設定したグローバル人材像を踏まえ、
卒業時に学生が修得すべきとした具体的能力を達成した学生数

◎対象:造形学部

◎測定指標・達成水準

評価測定シートを独自に策定し、各項目につき5段階評価を行う。3以上を達成水準とし、15項目中8項目達成を目標とする。

◎指標・水準設定の考え方

学生個々の専門分野の特徴的側面を評価できるよう項目別評価とし、適正な評価項目を選択する。

◎達成する学生数設定の考え方

対象は全卒業生。外国語力スタンダード、海外留学経験を満たさなくとも、ここで設定した具体的能力達成者で、8.7%を補完する。

造形学部	平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値
達成学生数(A)	80人	155人	110人	159人	150人	318人	210人	332人
対象学生数(B)	1,050人	1,004人	1,050人	971人	1,050人	1,024人	1,050人	1,067人
達成割合(A/B)	7.6%	15.4%	10.5%	16.4%	14.3%	31.1%	20.0%	31.1%

- ④ その他本構想における取組につきましては本文参照のこと

〈産業人材の育成に関する目標の状況〉

《 取組 1 》 「グローバル能力測定プログラム」

◎取組概要

「日本の美術やデザイン、自身の作品について自らの言葉で海外に向け発信出来る人材」を具体的目標に修得すべき具体的能力(15項目)を設定し、主観的評価に客観的評価を組み合わせて測定し、能力獲得のための効果的なフィードバックを行う。入学年度と卒業年度に、主観的アセスメント(本学と(株)リアセック共同開発の本学独自テスト)と客観的アセスメント「PROG」を同時に実施する。評価結果について、解説セミナーを実施し、学習支援を行う。

◎達成目標の考え方

全学生を対象に入学年度と卒業年度に本プログラムを実施。リテラシーとコンピテンシーの2大要素から構成される客観的アセスメントで、美術大学の特殊性に偏らず総合的にバランスのとれた能力を獲得する。

平成26年度		平成27年度		平成28年度	
目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値
110人	159人	150人	318人	210人	332人

《 取組 2 》 「MAU Global Program」(仮称) の開発と開設

◎取組概要

効果的なグローバル人材育成を目的に、教育課程(正課)の授業科目や課外講座などで展開されるグローバルな諸活動を精選・充実・包括し、コンパクトに体系化した教育プログラムを開発し、平成27年度の開設を目指す。自発的にグローバル人材に必要とされる能力の獲得を希望する学生は、本プログラムを入学時に履修登録、3年間を標準履修期間とし、就職活動、卒後教育、生涯教育に資するものとする。能力測定プログラムと連動した学習支援体制を検討する。

◎達成目標の考え方

修了書(履修証明書)を発行する。この証明書は、ジョブ・カード制度におけるジョブ・カード・コアとして記載可能、公的な位置づけを持たせることができる。

平成26年度		平成27年度		平成28年度	
目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値
0人	0人	40人	0人	80人	0人

《 取組 3 》 「海外インターンシッププログラム」

◎取組概要

美術・デザインを専門とする本学学生に相応しい、専門分野での教育効果のある海外派遣先を開拓し、インターンシップを行う。事前事後学習を整備し、短期留学の一環としての単位取得を検討する。派遣先は5年間で10社とし、出版社・アートギャラリー・デザイン関係のNPO団体などを候補にしている。

◎達成目標の考え方

専門分野に関連する研修先において、自身の専門的技術や知識の通用性を確認することにより、社会で必要とされる能力の獲得の動機付けとし、社会性及び国際性を同時に培う。

平成26年度		平成27年度		平成28年度	
目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値
5人	7人	8人	5人	12人	7人



〈大学が目指す国際通用力向上のための具体的目標の状況〉

⑤ 日本人学生の海外留学生数・全学生に対する比率

⑦ 協定に基づく留学プログラムにおける派遣学生数・全学生に対する比率

注1) 各年度における4月1日から3月31日までに海外の大学に派遣された日本人学生数について記載する。
注2) 記載欄のうち下段には、諸外国の大学等との学生交流に関する協定等(以下「協定等」という。)に基づき、教育又は研究等を目的として、海外の大学等(海外に所在する日本の大学等の分校は除く。)に派遣される日本人学生数を記載する。

	平成23年度	平成24年度	平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	実績値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値
海外留学生数(A)	4人	4人	63人	75人	165人	72人	317人	84人	485人	79人
	(4人)	(4人)	(8人)	(7人)	(10人)	(11人)	(12人)	(13人)	(20人)	(12人)
博士・博士後期課程在籍者	0人	0人	5人	0人	5人	0人	5人	0人	5人	0人
	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)
修士・博士前期課程在籍者	0人	3人	10人	7人	30人	7人	60人	13人	60人	2人
	(0人)	(3人)	(0人)	(1人)	(0人)	(1人)	(0人)	(7人)	(0人)	(2人)
学士課程在籍者	4人	1人	48人	68人	130人	65人	252人	71人	420人	77人
	(4人)	(1人)	(8人)	(6人)	(10人)	(10人)	(12人)	(6人)	(20人)	(10人)
全学生数(B)	4,487人	4,437人	4,500人	4,505人	4,500人	4,487人	4,500人	4,529人	4,500人	4,531人
海外留学生比率(A/B)	0.1%	0.1%	1.4%	1.7%	3.7%	1.6%	7.0%	1.9%	10.8%	1.7%
	0.1%	0.1%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.3%	0.3%	0.4%	0.3%

⑥ 外国人留学生数・全学生に対する比率

⑦ 協定に基づく留学プログラムにおける受入学生数・全学生に対する比率

注1) 留学生数の計上に当たっては、「出入国管理及び難民認定法」別表1に定める「留学」の在留資格を有する者に加えて、以下の者についても計上することとします。
・「留学」の在留資格を有さない短期留学生
・「日本人の配偶者等」等の在留資格により大学に在学する外国人学生
・学位や単位の取得を目的とはしないものの、大学院生レベルの教育指導を受ける外国人研究者として当該大学が受け入れている者

注2) 記載欄のうち下段には、協定等に基づき、教育又は研究等を目的として、当該大学に受入れる外国人留学生数(内数)を記載する。

	平成24年度	平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値
外国人留学生数(A)	238人	282人	252人	327人	259人	372人	296人	417人	338人
	(4人)	(8人)	(4人)	(10人)	(4人)	(12人)	(7人)	(20人)	(7人)
博士・博士後期課程在籍者	5人	5人	3人	5人	7人	5人	8人	5人	5人
	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)
修士・博士前期課程在籍者	42人	46人	55人	51人	49人	56人	57人	62人	85人
	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)
学士課程在籍者	183人	219人	186人	257人	196人	295人	221人	326人	238人
	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)	(0人)
上記以外(短期留学生、研究生等)	8人	12人	8人	14人	7人	16人	10人	24人	10人
	(4人)	(8人)	(4人)	(10人)	(4人)	(12人)	(7人)	(20人)	(7人)
(A)のうち、在留資格「留学」の者(B)	209人	252人	228人	297人	231人	342人	252人	387人	302人
	(4人)	(8人)	(4人)	(10人)	(4人)	(12人)	(7人)	(20人)	(7人)
全学生数(C)	4,437人	4,500人	4,505人	4,500人	4,487人	4,500人	4,520人	4,500人	4,529人
外国人留学生比率1(A/C)	5.4%	6.3%	5.6%	7.3%	5.8%	8.3%	6.5%	9.3%	7.5%
	0.1%	0.2%	0.1%	0.2%	0.1%	0.3%	0.2%	0.4%	0.2%
外国人留学生比率2(B/C)	4.7%	5.6%	5.1%	6.6%	5.1%	7.6%	5.6%	8.6%	6.7%
	0.1%	0.2%	0.1%	0.2%	0.1%	0.3%	0.2%	0.4%	0.2%

⑧ 外国語による授業の実施率(外国語による授業※／全授業数※)

※日本語の併用や外国語教育を主たる目的とするものを除く。

	平成24年度	平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値
外国語による授業数(A)	6回	20回	19回	50回	34回	80回	49回	120回	59回
全授業数(B)	1,140回	1,140回	1,232回	1,140回	1,246回	1,140回	1,264回	1,140回	1,317回
割合(A/B)	0.5%	1.8%	1.5%	4.4%	2.7%	7.0%	3.9%	10.5%	4.5%

⑨ 外国人教員等(国外の大学での学位取得、通算1年以上教育研究に従事した日本人教員を含む)比率

注1) 各年度の5月1日現在の状況を記載。
注2) 「総教員数」は、学校基本調査における「教員数(本務者)」を記載。

	平成24年度	平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値
外国人教員等(A)	20人	22人	16人	25人	20人	25人	19人	26人	18人
	うち、外国人教員	6人	5人	5人	5人	5人	5人	5人	5人
総教員数(B)	180人	180人	174人	180人	176人	180人	174人	180人	172人
割合(A/B)	11.1%	12.2%	9.2%	13.9%	11.4%	13.9%	10.9%	14.4%	10.5%

⑩ 教員の博士号(外国における相当学位含む)取得率

注1) 各年度の5月1日現在の状況を記載。
注2) 「総教員数」は、学校基本調査における「教員数(本務者)」を記載。

	平成24年度	平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値
教員のうち博士号取得者数(A)	14人	15人	15人	16人	17人	17人	16人	18人	16人
総教員数(B)	180人	180人	174人	180人	176人	180人	174人	180人	172人
割合(A/B)	7.8%	8.3%	8.6%	8.9%	9.7%	9.4%	9.2%	10.0%	9.3%

⑪ 教員あたり学生数(S/T比)

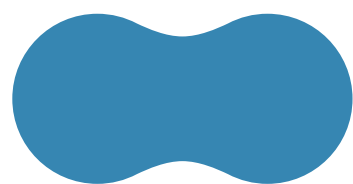
注1) 各年度の5月1日現在の状況を記載。
注2) 「総教員数」は、学校基本調査における「教員数(本務者)」を記載。

	平成24年度	平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値
総学生数(A)	4,500人	4,500人	4,505人	4,500人	4,487人	4,500人	4,520人	4,500人	4,529人
総教員数(B)	180人	180人	174人	180人	176人	180人	174人	180人	172人
割合(A/B)	25.0%	25.0%	25.9%	25.0%	25.5%	25.0%	26.0%	25.0%	26.3%

⑫ 一定の外国語力スタンダード(TOEIC 800点 等)を満たす事務職員の割合

注1) 各年度の5月1日現在の状況を記載。
注2) 「事務系職員総数」は、学校基本調査における「職員数のうち事務系(本務者)」を記載。

	平成24年度	平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値	目標値	実績値
外国語力スタンダードを満たす事務系職員数(A)	5人	8人	7人	12人	8人	16人	10人	20人	9人
事務系職員総数(B)	102人	102人	98人	102人	99人	102人	95人	102人	90人
割合(A/B)	4.9%	7.8%	7.1%	11.8%	8.1%	15.7%	10.5%	19.6%	10.0%



Globalize!
Musashino Art University

武蔵野美術大学
グローバル人材育成プログラム
活動実績報告書

発行日 2017 年 12 月 1 日

発行 武蔵野美術大学
学生支援グループ 国際チーム
東京都小平市小川町 1-736
Tel. 042-342-6041

編集 杉本勝彦
デザイン 菅渉宇（スガデザイン）
イラストレーション 深川優

印刷 株式会社アトミ



GGJ
Go GLOBAL JAPAN
MUSASHINO ART
UNIVERSITY